

ハイスクールD×D～四天の龍を宿す赤龍帝～

ネヘモス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしも、イッセーが遊戯王ARC-Vの四天の龍の力を宿していたら？という妄想が生み出した小説。

WARNING!!

他作品クロスあり！

書ききれなかつたタグ

ジョジョ要素（用語のみ）

敵の魔改造

目 次

プロローグ																					
設定（兵藤一誠と四天の龍関係）																					
旧校舎の四天の龍と赤龍帝																					
第1話 歴代最強の赤龍帝、墮天使と再開す																					
第2話 過去の回想と墮天使の決意																					
第3話 猫しようと霸権の赤龍とスキマ妖怪																					
第4話 邂逅、グレモリー眷属と『無限』																					
第5話 『無限』、四天の龍の真実を語る																					
第6話 頂きに達した激情は叛逆の片鱗を呼び覚ます																					
第7話 神器、暴走！一誠、幻想郷に帰還する																					
幻想郷での日常①																					
第8話 幻想郷での日々、一誠の平穏な日常？																					
紅い霧の追憶「赫焉の希望『博麗一誠』」																					
戦闘校舎のトリップルドラゴン																					
第9話 紅の記憶																					
第10話 レーディング・ゲーム準備開始																					
第11話 グレモリー眷属の修行																					
第12話 グレモリー眷属の最凶布陣																					
第13話 不死鳥は気付かぬうちに霸王の逆鱗に触れる																					
第14話 襲来、U.S.C																					
第15話 不死鳥v.s. 最強（凶）コンビ																					
第16話 今代の赤龍帝は女難の相が絶えないそうですよ？																					
76	72	67	61	58	55	52	49	40	37	32	27	23	18	14	10	4	1				

覚醒霸王とエクスカリバー

第17話

白麗の力と「言霊術（げんれいじゅつ）」

—
—
—

80

プロローグ

——十年前、姫島神社。

1人の女性と2人の少女が大勢の黒装束に襲われていた。

「姫島朱璃、その忌み子2人をこちらに渡せ！」

「嫌です！私の娘とその友達を貴方に引き渡すくらいなら、死んでもこの子達を守ります！」

朱璃と呼ばれた女性は2人の少女の盾になるように黒装束に立ち塞がる。

「やめて！おかあさん、わたしのためにしぬなんてやめてよ！」

「そうです！バラキエル様が来るまで持ち堪えれば…」

「その前にお前達の命は無くなつてゐるがな！」

黒装束は刀を抜き、3人に迫る。

「朱乃！レイナちゃん！」

女性が身を呈して少女達を庇う。

ああ、せめてあの人さえいてくれたら。今この場にいらない自分の夫を想う。凶刃に刈られて自分が死んでもこの子達は助かるだろう。でも、この人たちのことだ。朱乃とレイナを野放しにはしない。

天に祈るしか無いのか。皮肉なのだ、墮天使と結ばれた私が天に祈るなどと。せめて、この2人が逃げてくれれば…。凶刃が女性を斬り殺そうとしたその時だつた。

「おまえら！そのひとたちからはなれろ！」

『Expllosion!』

無機質な電子音と同時に赤い何かが刀に衝突した。しかも、事もあろうにそれを真つ二つにへし折った。

それはまだ齢10にも満たない茶髪の少年、しかし、その左腕は緑色の宝玉が埋め込まれた赤い異形のものであつた。

「神器の所有者!?こんなガキが!?
セイクリッド・ギア

「イッセー君（ちゃん）！」

「だいじょうぶ？しゅりさん、あけちゃん、れいちゃん
「ありがとう…!?イッセーちゃん、後ろ！」

「え…？」

現実とは残酷なものである。

黒装束がイッセーの背後に迫り、そして、
その背中を無慈悲に斬り裂いた。

「これで誰も我らを止められまい…」

「あ、あ、あ…」

「安心しろ、朱璃、忌み子、そして、墮天使。お前達もすぐに小僧の下
に送つてやる」

イッセーの斬られた瞬間を目の当たりにした朱乃、レイナは放心状
態に陥り、朱璃は2人を庇う体勢をとった。

「死ね」

今度こそ黒装束の凶刃が自分たちを殺す。そんな事を考えていた
矢先だった。

「イッセー…ちゃん？」

「あ？あのガキがどうした？」

朱璃の咳きに黒装束が振り向くと、

「…キミ、邪魔だよ…」

今しがた殺したと思つた少年^{イッセー}が立ち上がりついていた。だが、
「あの一撃を食らつて立ち上がつたのは褒めてやるが、神器なしでど
う戦う気だ？」

「神器？ああ、キミを倒すのにそんなものは要らない。なぜな
ら…」

――キミは今から毒龍の餌食になるのだから…。

『…い、お…う！』

「うーん、あと5分…」

『まだ起きないのか、イッセーは』

『困つた主ね全く』

『早く起きないと身体に毒ですよ？』

『…なんか、相棒がすまんな。おまえら』

『ドライグ、お前も手伝えよ…』

『分かつた。全く世話が焼ける』

『じゃあ行くぞ、セーの…』

『!!!!起きろ！イツセー（主様）!!!!!!』

「おわあああああああ!!耳がああああ!!」

ベッドから転げ落ち、自分の中の存在に叩き起された。自分の中で過去最悪の日覚めではないかと思つた。

「お前ら！もう少し人の迷惑考えろよ!!」

『そりや、目覚ましを掛けてないイツセーが悪い』

『右に同じ』

『私の主として情けないですよ…』

『あまり起きるのが遅いと体にさわりますよ?』

『というか相棒よ、新学期早々に遅刻する気か?』

新学期早々に遅刻？時計を恐る恐る見てみると…

その針は8時を回っていた。

「…………お前らサンキュー————!!」

これが俺、兵藤一誠の駒王学園での高校生活2年めの始まりだった。

設定（兵藤一誠と四天の龍関係）

兵藤一誠（CV：梶裕貴）

性別：男

種族：人間

年齢：7→16

好きなもの

仲間、遊戯王、満足

嫌いなもの

仲間を傷つける者、外道

所持神器

赤龍帝の籠手

司祭の振り子

黒牙の長槍

蝕毒の紫鞭

八頭蛇神の鎖槍

現在可能な禁止手

赤龍帝の鎧

毒龍の鎧

赫龍帝の極龍鎧

霸王黒龍の叛逆鎧

↓黒龍帝の叛逆鎧

霸王龍の片鱗鎧

能力

龍を呼び、従え、御する程度の能力

絆を交わした者の力を呼び起こす能力（幻想郷では100%発動。D×D世界では「程度の能力」までは発動しない）

歴代最強と言われる赤龍帝にして霸王龍ズアーヴの転生体。十年前、姫島母娘ならびにレイナーレを助けようとして死にかけたところをオーフィスに四天の龍を宿される形で助けられる。

それ以降四天の龍の力を扱うようになり、修行したことで派生系までも使えるようになる。

その正体は先代博麗の巫女の一息子。さらに幻想郷における最強の人間で博麗神社史上初にして最強の神主。元々ドラゴンを引き寄せやすい体质。

そして、史上最強の朴念神（誤字にあらず）。ドライグ及び四天の龍はこれのせいで胃酸がマツハ。更に、実は重度のシスコン（靈夢に対して）

原作開始時点で赤龍帝の籠手の「ジャガーノート・ドライブ」龍を使用可能。しかも、あろう事がデメリットを完全に克服した状態で。更に四天の龍もまた神器として存在する。

幻想郷では2つの能力を使うことが出来、後者の能力はもはや「程度」では済まされないほど強力。自分と絆を交わした者の力（幻想郷では能力まで）を行使する。二つ名は「幻想郷で絶対に歯向かつてはならない人間」「賢者をも誑し込む朴念神」など（後者に至っては本人は否定している）。

「ウエルシュー・ドラゴン 赤い龍」ドライグ（CV：マダオ）

性別：男

種族：ドラゴン

年齢：推定2000以上

好きなもの

イッセー、仲間、満足

嫌いなもの

イッセー及び仲間を愚弄する者
能力

10秒ごとに力を倍増させる程度の能力

赤龍帝の籠手に宿るドラゴン。そして、今作で最も苦労人（主な原因はイッセーの女性関係）。

「霸權の赤龍」オッドアイズ（CV：小野賢章）

性別：男

種族：ドラゴン

年齢：不明

好きなもの

イッセー、遊戯王（主にペンドュラム関係）、満足

嫌いなもの

イッセー及び仲間を愚弄する者

能力

力を倍加させる程度の能力

四天の龍の1体にしてペンドュラムの頂点の龍。モデルは「オッドアイズ・ペンドュラム・ドラゴン」。能力は一見ドライグの下位互換に見えるが、こちらは常時発動。

ズアークが分裂した時にズアークの意思を継いだドラゴンだったが、ズアークが復讐から開放されたことにより、無害なドラゴンになる。

一誠の精神世界では人間の姿で存在している。イメージは「虹彩の魔術師」。

四天の龍の中で唯一デフォルトでも一誠の事を名前で呼ぶ。性格としては前の持ち主の榊遊矢に近い。

神器としての姿は「司祭の振り子」。

「超越の黒龍」ダーク・リベリオン（CV：高木万平）

性別：男

種族：ドラゴン

年齢：不明

好きなもの

イッセー、遊戯王（主にエクシーズ関係）、満足

嫌いなもの

イッセー及び仲間を愚弄する者

能力

相手の力を半分奪い取る程度の能力

四天の龍の1体にしてエクシーズの頂点の龍。モデルは「ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン」。能力はアルビオンに似ているが、対象に触れる必要が無い代わりに連続で使用することが出来な

い。ズアークの分裂体の1体。

オツドアイズ同様、精神世界では人間の姿を取る。モデルは「黒牙の魔術師」。性格としてはユートに近い。

「調和の白龍」クリアウイング（イメージCV：渕上舞）

性別：女

種族：ドラゴン

年齢：聞いたら旋風のヘルダイブスラッシュ

好きなもの

イッセー、遊戯王（主にシンクロ関係）

嫌いなもの

イッセー及び仲間を愚弄する者

能力

相手の能力を跳ね返す程度の能力

四天の龍の1体にしてシンクロの頂点の龍。モデルは「クリアウイング・シンクロ・ドラゴン」。能力は相手が発動した能力を跳ね返す、ないし無効化するというもの。ズアークの分裂体の1体で四天の龍唯一の女性。理由は四天の龍をモデルにした魔術師の中で唯一「白翼の魔術師」が女性だから。

精神世界では「白翼の魔術師」の姿をしている。性格は前の持ち主のユートとは正反対でしつかり者。だが、イッセーの女性関係についても頭を抱えている。

「結合の紫龍」スター・ヴェノム（CV：小野賢章）

性別：男

種族：ドラゴン

年齢：不明

好きなもの

イッセー、遊戯王（主に融合関係）、満足

嫌いなもの

イッセー及び仲間を愚弄する者

能力

能力を喰らい己がものにする程度の能力

四天の龍の1体にして融合の頂点の龍。モデルは「スター・ヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン」。能力は相手の能力を一時的に奪い取るというやつ。ただし、1人の能力しか奪えず、能力が重複すると古い能力は消える。ズアークの分裂体の1体。

精神世界では人間の姿を取る。モデルは「紫毒の魔術師」。性格は前の持ち主のユーリ同様殘忍で一人称は「ボク」。また、「毒龍の紫鞭」という神器として存在している。

「八頭の蛇神龍」 アナンタ（CV：大塚明夫）

性別：男

種族：邪龍

年齢：不明

好きなもの、嫌いなもの：特に無し
能力

回復を阻害する程度の能力

今作オリジナルの邪龍（蛇龍）。モデルは「邪龍アナンタ」。能力は回復を阻害する程度の能力で、あらゆる回復を阻害する。邪龍異変の首謀者だったが、イッセーの力に圧倒され、敗北。その後、仲間になる。

オリ禁手

赫龍帝の極霸龍鎧

ジャガーノート・ドライブ

霸龍^{ジャガーノート・ドライブ}を完全制御した鎧。暴走することがない代わりに某超人

と同じ時間制限が存在する。この時は（冗談抜きに）神を殺せる上に龍殺しの類の力を受け付けない。

毒龍の紫鎧

蝕毒の紫鞭の禁手。見た目が完全にスター・ヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴンのそれになる。

霸王黒龍の叛逆鎧

赤龍帝の籠手の禁手亞種形態「霸王龍鎧」の一つ。モデルは「霸王黒龍オッドアイズ・リベリオン・ドラゴン」ってかほぼその姿。

発動に条件があり、ドライグ、オッドアイズ、ダーク・リベリオンの同意が必要。敵意を察知し、殲滅する能力を持つ対多数戦用の禁

手。

黒龍帝の叛逆鎧

ダーク・リベリオンの力を赤龍帝の鎧に宿した禁手亞種形態：の不完全体。一定威力の攻撃を無力化出来る能力を持つ。見た目は赤龍帝の鎧を黒く染めて所々に赤いラインが入ってる感じ。

霸王龍の片鱗鎧

「霸王龍」ズアークの力の片鱗が宿っている鎧。ある程度の実力者じやないとプレッシャーに動けなくなる事もありうる。発動キーは「プロモーション・Z—ARC 起動」

旧校舎の四天の龍と赤龍帝

第1話 歴代最強の赤龍帝、堕天使と再開す

よう！俺は兵藤一誠！今全速力で走っている。何故かつて？それは、学校に遅刻しそうだから。そして、もう一つは：

『イッセー君!! 今日こそ私と登校して――!!』

絶賛女子から逃げているからだ！

（全く、こんなのどこがいいんだよ！松田と元浜の頭を疑う！）

確かに女子にモテるのは男として悪い気はしない。だがな、

「人数にも限度があんだけおおおおおお!!」

俺、大勢の女の子（推定20人以上）から逃げてるなう!!

『赤龍帝の宿命、いや、ドラゴンに魅入られた者の宿命だ。諦めろ』

『『『右に同じ（ですね）』』』

コイツら本当に神すら恐れる天龍なのか!? まあ、ドラゴンだからこんな事の対処法は知らないで当然か。なら、

「クリアウイング！」

『はいはい。戦いでもないのに私の力を使わないでください：』

『すまんな、こつちの禁バランス・ブレイカ'手ハンドがコントロールできるようになつたら

俺がやるから』

『分かつてますよ。主様が頑張つてるのは十年前から知つてますから』

俺は背中にエメラルドグリーンの翼が生えるのを確認すると道の途中で思いつきり屈伸して

空に飛んだ。比喩表現ではない。文字通り空を飛んだ。

……そとか、もうあれから十年経つのか。

十年前に起こった姫島神社の襲撃事件。それは、俺、朱璃さん、朱ちゃん、そしてレイちゃんに深い傷痕を残した。

当時のことを俺はハツキリと覚えていない。俺はあの時黒装束に斬られて、そして、コイツらと出会つた。

そこから先は覚えていない。次に目が覚めた時に俺が見たのは血

塗れになつた黒装束とその返り血を浴びた俺自身、そして、化物を見るかのような怯えた目をした2人の少女だつた。

結果論を言えば朱璃さんは助かつた。だが、その代償として朱ちゃんとレイちゃんは俺から離れていつた。

俺は子供の頃から変わつた人間だと自覚していた。丁

度5歳の頃だつたか。それは俺に姿を現した。

名を「赤い龍」ウエルショ・ドラゴン ドライグ。神滅具の1つ「赤龍帝の籠手」ロングヌス・ブーステッド・ギア に宿る

二天龍の一 角とだ言つた。

ドライグは自分を使いこなせば世界を意のままに出来ると（当時5歳の）俺に囁いた。だが、俺はそんなことに興味などなかつた。

では、何のために力を欲するのか、ドライグは俺に尋ねた。俺は迷わずこう答えた。

「この力が守ることに使えるのなら、俺は家族や大事な人を守るために使いたい、と

校門を突つ切つて自分の靴箱を見る。

「何で女つてこんなに手紙を書いて飽きないのかね？」

そこには溢れんばかりのラブレターらしき封筒の山。高校入つて1年で200通近くは貰つていたが、今年もこの光景を見るハメになりそうだ。

「おーおー、嬉しい悩みじゃないの？ イッセー？」

「キミの色恋沙汰とかは置いておいて、仕事の話がある。早く教室に行こう」

「分かつてるよ、松田、元浜」

背後から話しかけてくる親友の名前を呼びながら3人組は教室に向かう。

「さて、仕事の話だが、ここ最近駒王町で異様な力がポツリ。ポツリと発生することが起こつてゐらしい。その原因を突き止めてくれと言うことだが、彼らは残る1人の男子と引つ括めて「駒王学園イケメン四天王」として名を知られている。

「さて、仕事の話だが、ここ最近駒王町で異様な力がポツリ。ポツリと発生することが起こつてゐらしい。その原因を突き止めてくれと言うことだが、彼らは残る1人の男子と引つ括めて「駒王学園イケメン四天王」として名を知られている。

のが今回の依頼だ

午前中の授業が終わり、昼休み。俺と松田、元浜は賞金稼ぎバウンティハンターの依頼の話をしていた。

「ちなみに、その力の種別は？」

「その異様な力つてのが2種類あつてな、その内1つは魔力と断定できたんだが、もう1つが全く検討がつかん」

「なるほど、お前らの意見から察するに悪魔関係か。多分、転生悪魔の契約関係の」

「流石イッセー、話が早い。今回の依頼はその異種族の保護、そして契約しようとしている悪魔の厳重注意だ」

あの人も苦労人なのなどということを思いつつ、昼休みを過ぎ???????して、いつも通る公園を通り過ぎ???????ようとしたその時。
「イッセー君？」

放課後俺は真っ直ぐに帰路につく。追手の女子を撒きながら。

「!?」

それは、少女の声のようだった。ただそれだけなら俺は通り過ぎていただろう。だが、俺はその少女の声に聞き覚えがあつた。
当たり前だ、忘れるものか。十年前のあの日から絶対に2度と聞くはずないと思っていた声。

「レイ…ちゃん…？」

「久しぶり、イッセー君」

黒髪を背中まで伸ばした少女レイナーレーもといレイちゃんがそこにいた。

俺はレイちゃんに近づいてそして気がついた。レイちゃんは、泣いていた。どうしたのと俺が尋ねたらレイちゃんはまるで神に許しを乞う罪人のような目でこう言つた。

「また会えて嬉しい…。でも、ごめんなさい…」

「レイちゃん？何を言つて…」

『イッセー！後ろだ』

ドスリ

背中から痛みを感じる。恐る恐る見てみると、そこには光の槍の様なものが俺の脇腹を貫いていた。
俺はその場で意識を失った。

第2話 過去の回想と墮天使の決意

イツセーが腹を貫かれる直後、

『『『イツセー！』』』

「（分かつてる！）」

誰かは分からんが濃密な殺意。対象はレイちゃんじやないなら、
「トリーズン・ディスチャージ!!」

ギシャアアアアアアアア!!

自分の中の黒龍が吠える。そして、俺を貫いてるであろう墮天使の光の槍から力を吸収し、

「クソが！貴様、何をした!?」

「俺の中のダーク・リベリオンに力を半減させて槍を碎いた。てか、お前不意打ちするにしても弱過ぎだろ、多分レイちゃんがまだ強いぞ」響いてきた男の声。こいつが不意打ちの犯人らしい。

「チツ！レイナーレ、退くぞ!!」

「レイちゃん！目を瞑つて!!」

レイちゃんが目を瞑つたのを確認すると、

「ダイクロイツク・ミラー!!」

眩い光がその場を包み込み、次の瞬間にはイツセーとレイナーレの姿はどこにも無かつた。

「クソッ！裏切り者が！」

男の墮天使は一言毒づくと自身もその場を去つていった。

その後、赤い魔法陣が出現し1人の女性が姿を現した。透き通るような赤いロングヘアを靡かせる彼女は先程の凄まじい力の正体を探ろうとここに来たのだが、

（どうやら墮天使が2人に、正体不明の力が…2つ？でもこの力は…敵に回ると厄介ね）

眷属にするのは自分には不可能だろう。この力は両方とも今の自分が兵士の駒が8つは必要。どうするかと思つた矢先、足元にあつたある物が目に止まつた。

それは1つの生徒手帳。その生徒の名前は——兵藤一誠。

????????????????

藤邸。俺はレイちゃんと状況整理をすることに…と思つたが依頼のことがあつたので後回し。俺とレイちゃんは、

「エツPでダイレクト！」

「負けた…」

遊戯王をしていた。まるで意味がわからんぞ！

「イッセー君、前より強くなつてない？主に魔術師のデッキに変えてから」

「いや、レイちゃんの堕天使も大概だよ…」

ちなみに俺は【四天の龍搭載型魔術師】でレイちゃんが【準堕天使】である。ちなみに戦績は10戦して五分五分。

「そんな滅茶苦茶な構築でよくここまで回るわね…。そのドラゴン共強すぎよ」

ドラゴン共というのは各召喚方法の頂点に立つと言われる四龍の事だろう。

ペンドュラムデッキのメインエンジンことオッドアイズ・ペンドュラム・ドラゴン。

絶対2500通すマンことダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン。

対効果モンスター用リーサルウェポンことクリアウイング・シンクロ・ドラゴン。

特殊召喚メタの一つの完成形ことスターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン。

俺のデッキにはこの四体が全部入つてる。どころか、俺自身に取り憑いている。

「それにしても、そんな事が。つまり、あの時黒装束を殺した龍って」「スターヴ・ヴェノムだな、疑いの余地なく」

十年前、朱璃さん、朱ちゃん、レイちゃんが黒装束に襲われた時、俺は母親譲りの直感で彼女達の危機を察知。赤龍帝の籠手で立ち向かつたが、返り討ちにあう。そして、精神世界でそれは起こつた。

『お前、ドライグ？』

俺の精神世界に現れたのは所謂ゴスロリの少女だつた。当時の俺から見ると少し年上に見えたその娘は4体の小さなドラゴンを抱えていた。

『確かに俺は赤龍帝だけど、もう俺は死ぬかもよ？何か用？』

『この子達、お願ひしたい。代わりにお前、生き返らせる』

そいつは俺に4体を託すと不思議な力で俺の体を治した。起き上がりつて戦おうとした矢先だつた。

『また返り討ちにあうのがオチだぞ？』

4体のドラゴンの内の1体、紫色の体躯のドラゴンが俺に話しかけた。というか俺の元に来た瞬間、ドラゴンは俺の身の丈の倍以上の大きさになつていた。どういうことだ…!?

『いくら赤龍帝の籠手とは言つてもお前はまだ子供。力量的にアレを倒そうものなら禁手を使わないと無理だ。そして、お前はまだそこまで至つていない。違うか？』

図星だつた。確かに俺は当時禁手まで至つてなかつた。ならどうすれば良いのか。このまま黙つて友達が殺されるのを黙つて見ていろとでも言うのか。

『違う。お前は俺に身体を貸してくれるだけでいい。お前に代わり、俺がアイツを倒してやる』

『…信じていいんだな？』

『相棒、コイツらの力の事なら信じろ。俺が保証してやる』

不意に俺の相棒のドライグの声が響く。

『…分かつた。よくわからぬがやり過ぎるなよ？』

『善処はする』

そして、あの時の惨劇が起こつた。あの時、他のドラゴンに身体を貸していればと思つたが、残念ながら他の三龍は戦える状態ではなかつたらしい。（後から聞いた話だが）

ちなみに俺が遊戯王のカードを見ていてコイツらと瓜二つのドラゴンが出てきた時は開いた口が塞がらなかつた。

「レイちゃん、それじゃあ俺は依頼を片付けてくるから留守番頼んでいい？」

今俺の両親はここにはいない。父親は物心つく前に死去、母親は別世界で仕事中。…今考えたら俺の家庭ってどうなつてんの？

「え!? う、うん…／＼／＼

そして、何でレイちゃんは顔を真っ赤にしてんの？

『＼＼＼天然タラシが＼＼＼』

コイツらが言つてる意味が分からなかつた。

「じ、じゃあ、行つてらつしやい、イッセー君」

「おう、行つてくる」

そう言つて俺は家を出た。それから少しして

（今の私、まるでイッセー君の奥さんみたい…／＼／＼）
レイナーレは嬉しさのあまり悶えていた。それと同時に覚悟を決めた。アザゼル様には悪いけど、彼らの暴走を止めるにはもうこれしかない。

私は今から、墮天使の陣営から抜ける。

そう固く心に誓つたのだつた。

第3話 猫しようと霸樞の赤龍とスキマ妖怪

「はあ、はあ、はあ…」

「もう逃げられないぜえ～？ 猫しようちゃんよ～？」

最悪だ。心の中で猫は毒づいた。妹の白音を探して人間界に来たが、グレモリー以外の悪魔に見つかるとは、迂闊だった。

はあ、もうダメかもしれない。そう思つた矢先だった。

「貴様が契約を強要しようとしている悪魔か？」

突如第三者の声が響いた。

「ああ!? 部外者は引つ込んでろ!!」

悪魔が魔力弾を声がした方に放つ。だが、

「攻撃するということは、抵抗すると捉えていいんだな？」

声の主は高らかに笑うと

明らかに異常なまでの力の波動を放出した。

「!? お前、強いな。お前も眷属にしてや…」

「それは無理な相談だ。振子の極地！」

声の主が姿を見せる。

それは赤を基調としたドラゴンだつた。

そのドラゴンは翼を持たず、両眼はそれぞれ違う色をしていた。

アオオオオオオオン!!

そして、そのドラゴンの咆哮はかつて世界を滅ぼした天龍を彷彿とさせた。

『私は「はそ霸樞の赤龍』せきりゆう オッドアイズ！ 悪魔如きが我を従えるなど、1億年早いわ!!』

「なつ!? 「霸樞の赤龍」だと!? そんな、アレは伝説の存在…。待て！ やめろ命だけは…」

悪魔はそのドラゴンの正体を知るやいなや命乞いをしたが、時既に遅し。

「祈れ。せめて命があることを。螺旋のストライクバースト!!」

ドラゴンの口から赤黒いブレスが吐かれ、それが悪魔を焼き尽くすという事にはならずドラゴンは1人の人間に姿を変えていた。そ

れは1人の少年だった。少年は左腕を赤い籠手？のような物に変え
ると悪魔に近づき、

「今後無理矢理眷属を増やす真似をしないように。さもないと…」

少年の背後に先程のドラゴンが垣間見えた。しかも、それ以外に4
体も。

「あのお方が黙つてねーから♪」

「5体のドラゴンを従える人間…!?まさか、兵藤一誠!?すみませんで
した！頼みますからあの方にだけは…」

「よろしい。とつと冥界に帰つて反省しなさい」

悪魔はその後逃げるよう冥界に帰つていった。

「さて、所でどうして俺から距離をとるの？」

「色んなもの身体中から放出しているアンタにだけは言われたくない
ニヤ！」

この子どうなつてんの!?人間特有の靈力に天使の光の波動、魔力、
妖力、神力…オマケにドラゴン…インチキ効果もいい加減にしろ!!
「やだなー。俺はただの赤龍帝だよ」

「…突つ込む気力も失せたニヤ…」

でも、5体のドラゴンを従えてる人間、兵藤一誠…?

「一誠に聞くニヤ。さつき言つてたあのお方つて誰ニヤ？」

「四大魔王の1人のサーゼクスの事だけど？」

魔王にタメ口!?この子どんだけ恐れ知らずなの!?しかも、私が思
いつきり知つてる悪魔だった!!

「サーゼクスと知り合いか?」

「他人の心を読むニヤ!?」

「ゴメン、さとり妖怪に読心術習つたら大体読めるようになつたから
本当に何者だろうか、この子は。

「さてと、本題に移つていい？黒猫さん？」

「はあ、分かつたニヤン。私に何のニヤ?」

「单刀直入に聞く。この世界で悪魔に追われるのって疲れない?」

……。

言つてる意味が分からない。

「それってつまり、アンタが私を置つてくれるの？ サーゼクス様は確かに信用してるけど」

「いや、お前を違う世界に逃がすつて言いたいんだ」「そんなこと出来るわけ……」

「出来るんだな、これが。絶

なら入れない場所が」

すうつと息を吸う素振り。そして、

「なーにー?」

一瞬の出来事だつた。一誠の隣に金髪金眼の美女がいつの間にか佇んでいた。

何も無い虚空から突然現れるように、私は人型こなして戦闘態勢を取つた。

コイツはヤバいと。一誠と同等かそれ以上の力があると。

「そんなに警戒しないでよー。折角可愛いイツセーの頼みで出てきて

……そんな心配は要らないようだ。

「ゆかりお姉ちゃん、本題」

「分かってるわよ♪この猫しようを幻想郷に逃がすんでしょ？お安い
御用よー」

すると

足元に目玉が沢山ある奇妙な空間が現れた。

「うれしいや、心

「もう、心配性ね。適当に落とすなんてこと」

「…今、白状したね…？」

さんにチクる」

「それだけはやめてええええええええ!!」

紫の悲鳴が響き渡つた。

依頼を終えて帰路につく。黒歌（後で聞いた猫しようの名前）を幻想郷に送るとゆかりお姉ちゃんから「たまには幻想郷に来なさいな。私が送り迎えするし靈夢達が喜ぶから」と言われた。

そうだな、たまにはあつちに行くのも悪くないな。母さんにも会いたいし。

『相棒の彼女候補が沢山いるしな』

「（なあ、何でそんなことになるの？）」

『『『『、この朴念神め！

！』』』』

「（なんですか！？）

『流石は歴代最強の赤龍帝』

『イッセーはモテるしな』

『俺はどうでもいいがな』

『主様、ここまで鈍いと私、頭が痛くなりそうです…』

『ボクは退屈しないから良いけどね』

「（なんですかーーー！？）

なんやかんやでレイちゃんの待つ我が家に帰宅。そして、レイちゃんに何があつたのかを聞くことにした。

「私はある墮天使の暴走を止めるためにイッセー君を探していたの」

レイちゃんの言うことを纏めるところだ。

ドーナシーカーという墮天使がとある神器使いの神器を奪い取る計画を立てている。アザゼル様のためにと言つてはいるが、どう考へても自分のためのように思えてならなかつたレイちゃんはドーナシーカの陣営に潜り込んだ。

そして、俺と接触できる機会を伺つた。あの公園で俺を見つけた時は心底嬉しかつたそうだ。だが、背後のドーナシーカーに気がついて俺に注意を促そうとしたが、ドーナシーカーの威圧感^{プレッシャー}に気圧されてそれが出来なかつた。そして、俺は腹を刺され殺されかけるが持ち前の能力でそれを回避、そして今に至る。

「でも何で俺なんだ？」

「イッセー君は三勢力のいずれにも属していないからよ」

「それは分かるが、ここはグレモリー眷属の領地だろ？俺が勝手に動くには…いや、問題ないな。一応リアス先輩に許可を貰いに行くが。サーゼクスの名前使つて」

「イッセー君、それってただの脅しよね？」

「そうとも言うな。さて、奴さんはどう出るやう」

次の日、俺は隣のクラスの木場祐斗に呼び出しを食らつた。用があるのはリアス先輩らしい。行く手間が省けたな。ついでに、

「イッセーが俺らの部活に来るのか…」

「女子共の言つてた夢が叶うわけね…」

「女子共の言つてた夢が叶うわけね…」

オカルト研究部のイケメン四天王が現実になつた瞬間だった。

第4話 邂逅、グレモリー眷属と『無限』

放課後、一誠は同級生の木場祐斗に連れられ旧校舎の前に来ていた。ちなみに松田と元浜も一緒だ。途中で一部女子から変な声が聞こえた気がしたが無視することにした。

「それにしても、生徒手帳を落とすとは…出来ればアイツには気づかれたくなかったんだが…」

「まあ、堕天使と戦つてたんだから仕方ないよ」

それにも、

『凄い憎悪だな』

「（ああ、こんなに憎悪に塗れた奴を見るのは久しぶりだ）」
顔にこそ出でていないが木場コイツ祐斗からは誰に向けてかは分からんが
とんでもない憎悪の感情を感じる。あの顔の下にどんな過去背負つ
てんだ？

なんやかんやでグレモリー眷属の拠点——オカルト研究部の部室前。
覚悟は、決めておくか。

「部長、兵藤君を連れてきました」

「ご苦労様、祐斗」

扉の先には銀髪の小さな女の子がソファに座っている。そして、その声は部屋の奥から聞こえた。シャンプーの香りがほのかに充満している。つまり件の人物は現在シャワー中と思われるが、

「（どうやつてここに水を引いたんだ？）」

一誠は考えるのをやめた。

少しして件の人物が姿を現した。赤い長髪を靡かせていた女性と黒髪の大和撫子風の女性を目の当たりにして俺は無意識のうちに目を瞑つた。

「兵藤一誠君よね？何で目を瞑つてるのかしら？」

「そのセリフは自分の格好を見てから言ってください」

「え？あら、服を着てなかつたわね。朱乃」

——不意に、あの時の記憶が蘇る。俺は、また、あの娘を…。
「お待たせ…って、兵藤君？そんな髪の色していたつけ？」

一誠の髪の色が変化したのにその場にいた全員が気がついた。

「すまない。俺の主は意識を精神世界の奥底に沈めてしまった。俺が代わりに要件を聞こう」

黒い髪、黒い瞳になつた一誠…のような何かは恭しく頭を下げる。
「…やはり、覚えていたのですね」

黒髪の大和撫子風の女性ー姫島朱乃が悲しい顔で一誠を見ていた。

「朱乃？ 知り合い？」

「ああ、十年前は俺の仲間がすまなかつたな」

一誠の姿をしたそれは、彼女を見て深々と頭を下げた。

「（本当は貴様が謝る場面なのだが？）」

『あの時は仕方なかつた。ボクは悪くない』

「あの時は仕方なかつたのですから、あなたは悪くありませんわ…」
奇しくもスター・ヴ・ヴエノムと朱乃の意見が一致した。

「朱乃？ 兵藤君とどんな関係？」

「…今は話したくないですわ」

「そう、話してくれるまで待つことにするわ。さて、本題に入つてもいいかしら？」

赤い髪の女性は深く追求することなく本題に入つた。

「奇遇だな、俺もアンタに相談があつたんだ。会うのは初めてだな…：
リアス・グレモリー？」

「あら、一応私はあなたの先輩なのだけれど、まあいいわ。私の話を聞いてくれる？」

「構わない」

「そう。なら单刀直入に言うわ。兵藤一誠君、あなたにこの部活に入つて欲しいの」

「俺は主では無いが理由を尋ねてもいいか？ というか、お前なら『眷属になれ』と言うと思ったのだが」

「そうしたかつたのだけど、あなた…の主を眷属にするのは不可能だと悟つたわ。力の残滓だけでも私を軽く超えている時点で、ね」
「案の定だつたか」

「想像はしてた」

あれ、いたの？松田と元浜。とかいうボケは置いといて、「自己紹介するわね。知つてるとと思うけど、私はリアス・グレモリー。

この眷属の王でオカルト研究部部長よ」

それから順に自己紹介。女王の姫島朱乃、騎士の木場祐斗、戦車の

塔城小猫、そして、

「知つてるとと思うが松田克人と」

「元浜瀬人だ。グレモリー眷属の兵士だ。2人だけのな

「もしかしなくとも、お前ら兵士の駒4つ分のポテンシャルあつたのか」

まあ、神器の力考えたら妥当かなと思つた。そして、

「俺は兵藤一誠…に憑いてるドラゴンの1体。名は『超越の黒龍』

ダーク・リベリオン」

黒一誠：ダーク・リベリオンは頭を垂れたことで話は進む。
「それで話というのは至極単純。兵藤君にオカルト研究部に入るよう
に伝えてくれないかしら？」

「少し待て…。構わない、その代わりお前の領地で好き勝手しても構
わないか？」と言つて いるが？」

「ええ、あなたは三勢力のどの陣営にも属さない。だから、私の眷属に
手を出さない限りは私はあなたの邪魔をしない」

「すまない、助かる。代わりに依頼があつたら何でも受けよう、だそ
うだ」

「頼りにしてると伝えてちようだい。それとこれ。あなたの生徒手帳
よ」

「ありがとう」

ダーク・リベリオンは一誠の生徒手帳を受け取ると部室を後にし
た。

少しして一誠が精神世界から戻つてくるとある場所で立ち止まる。
そこにはご丁寧に「KEEP OUT」のテープが貼つてあつた。そ
して、もう一つ

「（この結界を貼つたのは、相当な実力者だな：サーゼクス当たりか
？）」

(着いた時点で気づいてはいたが) 部室よりも強固な人払いの結界を貼つてあり、その奥からリアス部長に匹敵するかと思われる力を感じた???

「(涙)あ、今はやめておくか)」

誠は深く関わることをやめた。

?????????して、その帰り道の事だつた。

「ズアーク、見つけた」

「いや、誰?」

黒髪ゴスロリの幼女?に絡まれた。てか、ズアークって何?する

と、

『お前!』

『久しぶり!』

『十年ぶりか』

『あの時は助かりました』

『ボクはどうでも良かつたのけど』

お前らこのゴスロリの知り合い?!こいつ何者だよ!?
「忘れてても仕方ない。私とは心の中で会つてゐるはず」
心の中、十年前、黒髪…!?

「お前、十年前の!?

「そう、我、『無限の龍神』^{ウロボロス・ドラゴン} オーフィス。初めまして

『霸王龍』ズアーク

『え!』

ゴスロリ龍神・オーフィスは俺とドライグに向けて特大の爆弾を置いていった。

第5話 『無限』、四天の龍の真実を語る

「霸王龍」ズアーク——それはARC—Vの世界線で世界を4つの次元に分裂させる原因になつたドラゴン。四天の龍が取り憑いている時点でまさかとは思つていたが、

「なあ、何で俺がズアークなの?」

まるで意味がわからんぞ…。そもそもズアークは架空の人物、架空のドラゴン。四天の龍が取り憑いているのは事実だが、だからと言って俺がズアークになる訳が…。

『諦めろ、イッセー』

『俺達を御している時点で』

『あなたには「霸王龍」の資質があります』

『て言うか、ボクはキミがズアークの転生体じゃないかつて思つてんだけど?』

…やべえ、心当たりがありすぎて逃げ道が無い。

『とどめを刺すと、それなら何故お前は「鎮魂」「水晶」「飢餓」そして「霸龍」(2つの意味で)まで使えるのだ?どう考えてもそう考えるのが妥当だと思うが?』

もうやめろ!俺のライフはとつぐにゼロだ!

「分かった、分かったから!それとオーフィスとか言つたつけ?俺の名前はズアークじゃない。俺は兵藤一誠だ。だからズアークって呼ぶのだけはやめる。後、俺を生き返らせてサンキューン。あの時の礼がしたいんだが」

あのまま死んでたらレイちゃん達を守れなかつただろうし。

「ん、分かったイッセー。ならお願ひ、その力でグレートレッド倒して」

おい、生き返させてくれたのには感謝してるが

『真なる赤龍神帝』を倒せと申すか…

「今すぐじやなくて構わない。でも、このままだと我、居場所無くなる」

あー、ならば…

「家に来るか?」

「……えつ?」

目に見えてオーフィスが動搖した。何だ? 唐突に顔が赤くなつた様な…。

『どうした? 熱でもあるのか?』

ピトッ

「ひやつ……//」

試しに額をくつつけてみる。熱は…あれ? どんどん上がつてる?

『『『『とうとう女誑しが龍誑しに昇格した!』』』』

『しかも、龍神を墮とすなんて…』

『アマツトさんに会つた時が怖いですね』

前ら本当に何言つてんの!?

『アーフィスは夢を見ていた。

『うか、久しぶりに笑顔を思い出したよ』

それは、短くも懐かしいズアークとの思い出。当時の彼?は復讐のみに囚われて暴れるだけの存在だつた。ズアークは全てを滅ぼそうとして次元の狭間に存在するグレートレッドまでもを倒そうとしていた。だが、あと一步及ばず敗北、ズアークは4体のドラゴンに分かれた。

「霸隕の赤龍」 オツドアイズ

「超越の黒龍」 ダーク・リベリオン

「調和の白龍」 クリアウイニング

「結合の紫龍」 スターヴ・ヴエノム

四龍に別れた後、オツドアイズがズアークの意思を継いだが、分裂体の一つ・榊遊矢の活躍により長らく忘れていた笑顔を思い出す。

『オーフィス、頼みがある』

『ん、何? ズアーク?』

『こいつらを、頼む』

それだけ言い残すと、ズアークの意思是消滅し、四龍はオーフィスに取り込まれた。

筈だつた。

十年前、オーフイスは駒王町でズアークの残滓を感じ取った。

ズアークの残滓を辿ると、そこには死にかけの少年がいた。その少年はドライグを宿していた。そして、その身にズアークの魂を宿していた。

『見つけた。ズアーク』

??自分の内で、よく分からぬ感情が渦巻いていたことに。この時のオーフィスは気づかなかつた。自分が喜んでいたことに。

質がつくとオーフィスは知らない部屋にいた。

本当にこの魔界の魔物は、

隣にいる……墮天使？はそう毒づいた。朴念神とは誰のことだと思つた。ところで、

「イツセー、どこ?」

一誠がいない。何故かその事実がオーフィスのよく分からぬ感
情を呼び起こした。

胸の中にはつかりと穴が空いた感じだった。何だこうこの感情は。ズアークがいなくなつた時のあの時と同じだ。

「イツセー…」

目頭が熱くなる。どこ？どこなの？お願いだから、

「起きたか？ オーフィス？」
「私を一人にしないで！」

突然、オーフイスの中の靄が晴れる感覚がした。いつぶりかは分か

「うひ、リフ、く、こ、一、言、つ、い、は、」と思ひて二寸成二行の二ソジから

「加勢するまでもないよ。兵士が優秀過ぎる。今頃、『粉碎・玉碎・

「そうね……。あの『烈風の蒼牙刃』と『黒炎の紅銃』喝采!!」とか言つてはぐれ悪魔をぶつ倒して頃だらうよ

「そうね…。あの『烈風の蒼牙刀』と『黒炎の紅銃』の使い手

だものね…

「イッセー!!」

オーフィスは人目を憚らずに一誠に抱きついた。よく分からない感情が満たされていく感覚がした。

「我、もう一度とイッセーから離れない」

「え、ちょ」

「…イッセー君？」

一誠がおそるおそる背後を見ると、今にも泣き出しそうなレイナーレの姿が。そして、

「私も混ぜて!!」

何故か知らんが自分に向かつてダイブしてきた。美少女2人に抱きつかれて女の子特有の匂いがして、あ、ちょ…。

俺は意識を失った。あれ？でもこの感覚身に覚えがあるような…。確々あの時は、吸血鬼姉妹とそのメイド、ついには巫女までもが飛びつてきた気が…。

俺は考えるのをやめた。

?????っと疲れた次の日。流石に超えてはならない一線までは超えることなく済んだ。

御だかレイちゃんとオーフィスが妙にツヤツヤに見えた気がしたけど気の所為だとオモイタイ。

『これで何回目だ？』

『逆に襲われるの？数えるのが面倒臭いくらい多くない？』

『て言うか、本当に最初に主様を襲つたのって誰かすら覚えていないのですが…』

『紅い霧の異変の後に泥酔した腋巫女』

『お前ら他人の古傷抉つてそんなに楽しいかよ!?』

『『『『それがドラゴンに魅入られた者の運命だ（ですね）』』』』

そんな運命いらない（切実）。そして、

『キヤツ！』

誰かにぶつかつた。声質からして少女、しかも日本人ではないよう

だ。この訛りは…イタリアか？

『失礼、大丈夫ですか？』

俺はイタリア語で話しかけてみる。

『大丈夫です。私急いでるのでこれで…。あなたに主の加護が有りますように』

修道服を着たその少女（所謂シスターってヤツ）は起き上がるなどどこに向かっていった。

「…で？あの金髪シスターがアイツの狙いか？」

「ええ、そうよ。お願ひイツセー君、ドーナシークを、止めて」

「分かつて。だけどその前に」

一誠が念を押す。そして一言、

「アイツの拠点を炙りださんとな

…前途多難な幕開けだった。

第6話 頂きに達した激情は叛逆の片鱗を呼び覚ます

金髪シスターと出会った日の夜のこと。

「レイちゃん。そろそろドーナシーカの狙いを教えてくれない?」

「そうね。ドーナシーカの狙いを教えましょウ」

レイちゃんが言うにはドーナシーカの狙いは金髪シスター・アーシア・アルジエントの神器「聖母の微笑」^{トライライト・ヒーリング}の強奪だとの事。それを聞いた途端、俺の中の何かがキレる音がした。

他人の神器を奪うということがどういうことが分かっているのか?神器とは所持者の魂そのものだ。それを奪うとは、その所持者を殺すことと同意になる。

「問題なのはアイツの能力なのよ」

「能力?」

「ええ、アイツはこちらの攻撃を全ていなす。まるでこちらの攻撃が分かつてるかのように」

攻撃を全ていなす…、こちらの攻撃を読んでいる…?なるほど。自然と(凶悪な)笑みがこぼれる。

「なら、俺がドーナシーカを相手しよう」

レイちゃんと、あろうことがオーフィス(あれ?オーフィスいたのとか言わない)までも目を丸くしている。

「夷はな、俺は以前に似たような能力を持つてやつと戦つて勝つたことがある」

?????????イちゃんの口が空いて塞がらなかつたのは言うまでもなかつた。

「という訳で、部長。交換条件だ。今から俺は堕天使がいるであろう廃教会に突つ込む。自由に暴れさせん権利をくれ」

「それで? 私にどんな利益があるのかしら?」「いずれ分かるさ、いずれな…」

巫山戯てネタに走った結果、木場、塔城、松田、元浜を監視として置くことで暴れられる権利を得た。その後、部長と姫島先輩は急用ができたとかでどこかに行ってしまった。

最も、松田と元浜がいる時点で監視の意味なんて皆無に帰すのだが。

「さて、俺は家に戻る。夜に合流しよう」

俺は家に戻り、レイちゃんとオーフィスに留守番を頼んだ。ちなみに俺が留守の間ドーナシーク側の堕天使に襲撃されたらしいが、オーフィスのお陰で事なきを得たらしい。

なんやかんやで廃教会。そこには木刀を帯剣した木場と元浜、モデルガンを構えた松田、メリケンサックを装着した塔城がいた。

「さて、案の定はぐれ神父と墮天使の気配がわんさか…。面倒だから松田と元浜で防御陣を突破しますか。ちなみに、大ボスは地下にいるな」

「なら、俺の番だな…。禁手化

松田のモデルガン、否、黒炎の紅銃が形状を変化させる。その銃口は、黒い竜の顎を彷彿とさせた。

「派手に行くぜ！ 黒炎弾!!」

黒い竜の口から黒い炎が弾丸のように放たれ、廃教会の全体を木つ端微塵に吹き飛ばした。

「悪い、力加減ミスった」

「サンキューな、松田。木場、塔城、ここで雑魚の足止めを頼めるか？」

恐らく廃教会周辺の森に隠れていたのだろう。はぐれ神父と墮天使の集団が。

「分かりました。元浜先輩、兵藤先輩をお願いします」

「気をつけて、2人とも」

「言われるまでもない！」

俺と元浜は祭壇の瓦礫の下敷きになっていた地下の入口から地下に突っ込んだ。

地下の儀式場のような空間、そこには大勢の墮天使とはぐれ神父、そして、

両の手に淡い緑の光を宿したドーナツ野郎、

その目から生氣を失つたアーシアの姿だつた。

そして、

俺の中の何かが完全に切れた。

「おい、墮天使。楽に死ねると思うなよ!! 禁手化!!」

『Welsh Dragon—XYZ Over Booster !!』

元浜の木刀が青い刀に変化、そして、それが白いドラゴンを模したような大剣に変化した。

「消えろ！ 滅びの爆裂疾風弾!!」

元浜が大剣を一閃すると、ドーナシーク以外の墮天使、はぐれ神父は9割方倒された。そして、俺は赤龍帝の籠手の禁手の亞種形

態。「超越の黒龍」の力を宿した龍の鎧。

「黒龍帝の叛逆鎧」を身にまとつた。

「ほう？ そこの黒いの。強いな。私の計画の邪魔になる。ここで殺してやろう!!」

俺の周りに大量の光の槍が精製される。俺はそれを見ると目を瞑つた。

（ふん！ 心を読んでも分かる。アイツは諦めている。これで…！）

「終わりだ、矮小な人間風情がああああああ！！」

光の槍の大軍が俺を貫く。そう思われたその時だつた。

「この程度か？ 墮天使？」

——霸王の咆哮!!

グギヤアアアアアアア!!!!

光の槍は、俺に当たる寸前に砕け散つた。

「どういうことだ!? 貴様、諦めたのでは!?」

「お前は誰の心を読んだつもりだ？ 残念ながらそんな事を考えたのは

…

俺はそいつに主導権を譲つた。

「主様の真似をした私ですが?」

「なつ：!? 貴様、多重人格か!?」

「7割正解。さて、堕天使さん？アンタに問題だ」

俺は赤龍帝の籠手の倍加能力で移動速度を上げて、その勢いのままドーナシークを殴りつける。

「グフッ!? だが、これなら新しい力で…！」

「オツサン、まだ分からんか？十乗倍加!!」

倍加10回分の力が左腕に溜まる。そして、

「今から俺はお前を全力で殴りつける。右か左か、好きな方を選べ」

ドーナシークは恐怖した。コイツはただの人間ではない。近づかれて初めて気づいた。

コイツの目は幾つもの死線をくぐり抜けてきた猛者と同じだと。「ま、待て！ 神器は持ち主に返すから、命だけは!! どうせやると言うなら一思いに右で…」

「心が読めるんだろ？なら、俺が何を考えてるか当てるかみろ」

ドーナシークは一誠の心を読む。

『N○！N○！N○！N○！N○！』

「ま、まさか左…？」

『N○！N○！N○！N○！N○！』

「り、両方…」

『Y e s ! Y e s ! Y e s ! Y e s ! Y e s !!!』

「まさか、神器の再生が追いつかないほどの連打…」

『Y e s ! Y e s ! Y e s ! Y e s ! Y e s ! O h M y G o d
!!!』

そして、

「オラ奥ラ！」

神器の、禁手化が、解けるまで、殴るのを、止めない!!

「オラ奥ラ!!!!」

禁手化が解けた時、そこには顔の原型を留めていないドーナシーク

と、ドン引きしているグレモリー眷属の姿があつた。

そして、

「あらあら、あの子つたら随分と派手にやつたわね？ここが幻想郷の

入口だつて分かつてないのかしら？」

「私はアイツにここの事は一切教えてないしね」

「でもあなたの義娘と一緒に色んな異変を解決したわよ？」

「そうね。断りもなく他人の息子を異変解決に使つた覚悟は出来てる

かしら？」

「ちよ、神無？その握り拳をこちらに向けないで…」

「時既に遅し、よ？靈拳『無双封拳』!!」

「嫌ああああああ！」ピチューン

人知れずにそんな会話があつた事を一誠はまだ知らない。

第7話 神器、暴走!?一誠、幻想郷に帰還する

アーシア救出作戦後、一誠の自宅にて。

『『『『やつちまつたな（やつてしまいしましたね）。相棒（主）（主様）』』』』

「ああ、やつちまつた」

あの後、リアス部長と姫島先輩が駆けつけた。その時には全て終わっていた。ちなみに元浜は泣いていた、アーシアを守ることが出来なかつたから。まあ、部長が僧侶の駒を使つて転生させて事なきを得たが（何故かラブコメの波動を感じた）。

だが、俺が問題視しているのはそこではない。

「何故龍の腕のままなの？」

俺の左腕が赤龍帝の籠手のまま戻らなくなつた。

原因はどう考へても「黒龍帝の叛逆鎧」、本来は「オツドアイズ・リベリオン・メイル霸王黒龍の叛逆鎧」というドライグ、オツドアイズ、ダーク・リベリオンの3体のドラゴンの力を一つに纏めあげた禁手「霸王龍鎧」の一つだ。だが、発現条件がやや特殊で、

①「霸龍」を使えること

②自分の怒りが一定基準に達すること

③ドライグ、オツドアイズ、ダーク・リベリオンの同意

この三つを満たさなければ発動しない。①と②は既に満たしていいるので問題なし。ところが、オツドアイズが同意しなかつた事でこの問題が発生した。当の本人は、

「え？ だつて、イツセーならあの程度の相手『ブーステッド・ギア・スケイル・メイル赤龍帝の鎧』で事足りただろ？」

あえて言おう、空氣読めと。

「どうすんのこれ？ もしかしながら俺戻らんといかんの？」
「戻るつてどこに？」

おつと、レイちゃんには話してなかつたな。あの世界の事。

「一緒に来る？ オーフイスも」

「ん、久しぶりに行きたい」

オーフィスはある世界のこと知つてゐるのか。流石は元次元の狭間の住人。つまりは、

「オーフィス、八雲紫つて名前に心当たりある?」

「ん、私の知り合い」

やつぱりか。ゆかりお姉ちゃんの事だからコイツの事を知つててもおかしくないな。

「で、どうするの? その世界つて言い方だとそこが異世界つて風に聞こえるけど?」

「ちよつと待つて」

俺は息を吸うと

「ゆかりお姉ちゃん!!」

「呼んだー? つてあらあら…」

ゆかりお姉ちゃんがスキマから出てきた。レイちゃんだけが啞然としていた。

「これは永琳じゃないと無理ね。今から永遠亭に送るわ。そこの墮天使とオーフィス諸共」

「ちよつと待つてゆかりお姉ちゃん? せめてレイちゃんの心の準備を…」

「ごめん♪もうスキマに送つちゃつた♪」

「…もう紫さんなんて嫌いだ」

俺は紫さんの精神に多大なダメージを与える猛毒を吐くとそのままキマ送りにされた。

「…そつ。次こそ輝夜に勝つてやる…」

幻想郷の迷いの竹林。銀髪に赤いもんぺの1人の女性が独白する。彼女の名前は藤原妹紅、不老不死の人間で迷いの竹林の案内人をやっている。

「はあ、癒されたい…」

そんな彼女の独白は思わず現実になる。

「…ふつ!? なんだよいきなりつて…イッセー!?

空からイッセーが降ってきた。イッセー!? 元の世界にいたはず

じゃ？まさか、自力で私に会いに：無いか。

見ると左腕が龍化している。どう考へても永琳に見てもらおうと思つて紫に頼んだら適当に落とされたつてところだろ。全く、「紫つていい奴ね！（相変わらず適当な奴ね）」
⋮本音と建前が逆になつたのに後で気づいた。

幻想郷での日常①

第8話 幻想郷での日々、一誠の平穏な日常？

「キミは今から毒龍^{ボク}の餌食になるのだから…」

これはあの時の記憶だ。俺、いや俺の身体を借りたスター・ヴ・ヴェノムはその姿を本来のものに変えた。

「私は飢えた牙持つ毒龍、眼前の敵を喰らい尽くす！」

『Venom Dragon Balance Breaker !!』

紫色の鎧が俺の体を包み込む。その体躯は巨大な蛇の様であり、背中には植物の弦の様な触手がうねうねと動いている。

「貴様、何者!？」

「意味無いとは思うけど『結合の紫龍』スター・ヴ・ヴェノム、その力を顕現した鎧、『毒龍^{ヴェノム・ドラゴン・バーブル・メイル}』とでも言おうか。そして、さようなら」

すると、二本の触手が黒装束に食らいつき、その四肢を喰らい尽くした。

そりやこんなもの見せられたらトラウマにもなるわ…。あの日、レイちゃんと朱ちゃんはこんなものを見たのか。

「悪いことしたな…」

「あれ? 起きたの、イッセー?」

うん? おかしい。どういう訳か永琳の声が聞こえる。確か、紫さんにスキマ送りにされてついでにレイちゃんとオーフィスも巻き添えを食らつて…。

「もしかしなくともここは…」

「幻想郷、永遠亭の病室よイッセー。いや、ここではこう呼ぶべきかしら?」

博麗神社の神主様?」

「他人行儀に接しなくてもいいよ面倒臭い。所で、左腕が治つてるのは…」

「妹紅に感謝しどきなさい。あの娘が貴方を運んできたのだから
ああ、妹紅が運んでくれたのか…。後で礼を…」

「それと、妙にあの娘ツヤツヤしてたけど何かした?」

「キノセイダトイイタイデス」

訂正、次会つたら10回くらいピチュろう。オラオラのラツシユ
で。

「まあ、私も少し貰つたけどね?」

…よく見たら永琳もツヤツヤしてるね?

「覚悟は、イイネ?」

「…手加減してね?」

——魔砲「ファイナル・スパーク」!!ピチューン
さて、永琳を物理的に説教すると、

「あつ!私の旦那様ー!!」

「一誠様!?師匠がまた失礼を…」

輝夜と鈴仙が入ってきた。

「旦那様♪私に会いに来たのよね?!一緒に呑みましようそうしましょ
う♪」

「ちよ、輝夜!俺お酒は…」

有無を言わさず呑まされる。ヤバ、頭がボーッとして…。

『??『相棒（主）（主様）、安らかに…』』』

イツら覚えてろ…、朦朧とする意識の中でそれだけを呟いた。

自分が覚めたらカオスなことになっていた。左を見れば永琳、右を見
れば鈴仙、身体の上に若干の重みを感じて見てみれば輝夜が眠つてい
た?????』

一矢纏わぬ、生まれたままの姿で。

「…またが」

頭痛がする。てか、幻想郷に来るといつもこうだな。コイツらは何
で俺が相手（何のとは言わんが）だと嫌がるどころか喜ぶんだ?

『イケメンだからだろ?』

『主様との子供はハイスペック確實ですし』

『要は、お前と結ばれたら勝ち組つて考えなんだろうぜ』

「ねえ? そうなの、紫さん?』

『お願い反省してるから呼び方を元に戻して。私何でもするから』

『今何でもつてとかいうセリフは取つておいて、

「レイちゃんとオーフィスは?』

「妖怪の山』

スツ（一誠がファイナル・パークの魔法陣を描く準備をする）

「お願い! 出来心でやつちやつただけなの!! だからそれだけは!!』

「あん、分かつた。じゃあ未来永劫呼び方固定ね、紫さん?』

「の日、紫さんは（俺の手により）しばらく精神的に再起不能だつたらしい。

方同時刻妖怪の山。

「やばい、どうしよう…」

「イナーレは最悪な状況に追い込まれていた。簡単に説明すると、
「さて侵入者さん? 弁明は、あるかい?』

注連縄を後ろに巻いた女性が私に絡んで来た。その女性、八坂神奈子は私を見るなり柱の様な何かで攻撃を仕掛けた。咄嗟に光の槍で防御したが、その後の猛攻には耐えきれず絶体絶命。よくわからぬ世界で死ぬのか私は…。

「ゴメン…。イッセー君…」

ふと、愛しい人の名前を口にすると、
「貴方、今誰の名前を!』

新手が来た様だ。その人物は緑の長髪に蛇とカエルの髪飾りを着けて巫女服の様な衣装を着ていた。

「…? イッセー、兵藤一誠…」

「何?! アイツの知り合いだつたのか!』

「かーなーこーさーまー?』

「いや、早苗? 妙な気配が突然現れたら攻撃するのは定石…』

「「その前に話し合ひつて選択肢は無かつたのか（ですか）？」

巫女少女、早苗の声に重なつてイツセーの声が聞こえた。

「神奈子？ 懺悔の用意は出来てる？」

イツセーがものすごく黒い笑みを浮かべてる…。

「ごめんなさいもうしません」

「素直で宜しい」

鶴の一聲だ、その時の私の気持ちは正にそれだつた。

「早苗姉、久しぶり」

「イツセー！ おかえり!! 所で守矢神社の神主には「ならん」イツセーの
いけずー!!」

夫婦漫才だろうか？ ものすごく悔しい。何で私よりもこの人たち
との方が仲がいいの？ 私の中のドス黒い感情が広がつていく。今な
ら悪魔にだつてなれる自信がある。

「何であの人あんなにドス黒い感情剥き出しにして、ああそう言えば
あの人アレのこと知らないんですつけ？」

早苗は納得が言つたかのように懐からあるものを取り出す。そこ
には

兵藤一誠専用幻想郷『重婚届』

正に私とあの人夢が叶うような素敵なことが書いてあつた。

「…私も仲間に入れて？」

「良いですよ」

赤い龍と四天の龍、この日から更に胃酸がマツハになつたことは言
うまでもなかつた。

ちなみにこの後、一誠は神奈子に氣絶させられ、気がつくと左に早
苗、右にレイナーレが生まれたままの姿で眠つていて、現実逃避した
のは言うまでもなかつた。

紅い霧の追憶 「赫焉の希望『博麗一誠』」

それは一誠が14の時に起きた。

幻想郷を妖気に満ちた紅い霧が覆つた。その霧は人体に有害であり、このままでは人里に被害が出るのは火を見るよりも明らかだつた。

「靈夢姉、これは異変だと思うんだけど?」

「大丈夫よ、どうせ魔理沙が解決してくれるから」

そんなんで大丈夫か、博麗の巫女。

「靈夢? 靈拳ーー」

「行つてくるわ。義母さんと一誠は神社を頼むわ」

先代巫女、博麗神無の（物理的）説得により、靈夢は異変解決に向かつた。

だが、この時一誠はとある仮説を思いついていた。

この異変は何かのSOSなのではないかと。

異変を起こせば博麗の巫女が動く、博麗の巫女とは幻想郷で最強の存在、だけど靈夢姉は未だに「夢想天生」を使えない。

「母さん、僕も行つてくる」

「気をつけなさい、一誠。万が一の事が起ころうものなら、真名を解放しても構わないわ」

一誠は一言ありがとうと呟くとクリアウイングの神器・セイクリッド・ウイング神聖なる凜翼を展開して異変の発生源と思われる紅い館に向かつた。そこで一誠を待っていたのはチャイナ服を着た赤髪の門番らしき女性だった。一誠は相手が構えたのを確認すると赤龍帝の籠手のみを展開して、

司祭の振り子との連携能力により門番らしき人物を一撃で気絶に追いやつた。ただ一度の攻撃も受けることなく、

館に入ると次は銀髪のメイドが襲いかかってきた。厄介なことに不可解な能力で瞬間移動するものだから仕方なく禁手を使うことにした。結果を言えば、一誠の赤龍帝の鎧には時間停止など通用しなかつた。そして、メイドはこの異変の概要を語った。

「お願ひです。妹様を救えるのは、お嬢様の能力が正しいならあなただけなのです」

「それはどういう事?」

銀髪メイドーー十六夜咲夜は異変の首謀者、レミリア・スカーレットの妹、フランドール・スカーレットについて話した。

495年もの長い間、抑えきれない狂気が今宵溢れそうになつてゐる事、そして、

それにより、靈夢姉の友達の魔理沙姉が重症を負つたということだつた。

そして、

レミリアの私室らしき場所から爆音とともに何かが降つてきた。それは一誠の視界を遮つた。そこで最初に感じたのは濃密な血の匂い、全身が真つ赤な人の様なもの、いや、

赤いリボンがトレードマークの靈夢姉が重症を負つていた姿だつた。

「靈夢姉!?

「か…は…。ゴメン…一誠…。私、お姉ちゃん…なのに、情けないね…」

ちゃんと修行すれば良かつたなあ、とぼやく靈夢姉。そして、「あはハハハハ!!!ネエ、マダ遊びタリナイヨ?遊ぼうアソボウ!!」

狂氣に満ちた笑いを上げてそこに来る人影が1人。それは、自分より年下だろう少女だつた。

その手には炎で出来た大剣が握られていて、その剣先には心臓を貫かれたであろう1人の少女が突き刺さつていた。

「お嬢様!妹様、おやめ下さい!その方は、あなたの姉様なのですよ!?

「はあ?こんなのが?ソンナワケ無いじやん!!コイツは、私をイミモナク閉じ込めた!ワタシハクルシカツタヨ?だから、今度はワタシガオネエサマを苦しめるの。ダッテソレがオネエサマノ愛情ナノデショウ!!」

——禁忌 「フォーオブアカインド」!!

少女——恐らくフランドールとはこの娘の事だろう、はスペルカードを宣言し、4人に分裂する。そして、それぞれが靈夢姉、魔理沙姉、十六夜さん、レミリアさんの息の根を止めようと大剣を振りかざした。肉を斬る嫌な音が辺りに響き、そこら中に鉄の匂いが充満する、という事にはならなかつた。何故なら、

「——召喚『四天の魔術師』!!」

靈夢姉を赤い剣を構えた男性が、魔理沙姉を緑の杖を持った女性が、レミリアさんを黒い槍を構えた男性が、咲夜さんを紫の鞭を持った男性がそれぞれ大剣を防いでいたのだから。それらは総じて魔法使いのような格好をしていた。

「おまえ、ジャマだな…。サキニコワシテモイイヨネ？」

「やれるもんならやつてみろよ」

「俺達の主は強いぞ？」

「て言うかね：」

「主を怒らせて」

「「「タダで済むと思うなよ？（思わないでくださいね？）」「」」

その魔法使いは姿を変える。赤い剣を持つ魔術師は一色の眼が印象的な赤い龍に、黒い槍を持つ魔術師は細い体躯の黒い龍に、緑の杖を持つ魔術師は綺麗な翼が印象的な白い龍に、紫の鞭を持つ魔術師は蛇の様な体躯の禍々しい紫の龍に変化した。

そして、それを呼んだ一誠もまた、その姿をえていた。

「俺はこれより、『博麗一誠』の名にかけてお前を救つてやる！」

その時、一誠の周囲の大気が震えたような気がした。

「我は霸の理を喰らう者

『我は神に抗う者』

『我ら霸の理を撃ち破りて、赫焉より世界を滅ぼす霸龍とならん!!』

????????誠はそこから先を覚えていない、気がついたら一誠は大きなベッドの上で仰向けになつていた。：何故か咲夜さんが自分の隣で寝息を立ていたのは何故だろうと思つていた。

起き上がるうとしたら左腕に異変を感じた。見てみると左腕が赤

龍帝の籠手のまま戻つていなかつた。一誠にはその症状に心当たりがあつた。

「限定期的とはいえ、『霸龍』を使つたからか？ドライグ」

『すまん、俺もこればかりは初めてのケースでな。戻し方が全くもつて分からん』

後で紫お姉ちゃんに聞いたところ、永遠亭でなら治せるだろうと助言を与えられた。

そして、暫く眠つていた時のことだつた。

「お兄様——!!」

一誠の体に謎の物体がダイブインしてきた。手負いの一誠には効果は抜群だつた。それは金色の髪をした少女だつた。そして、背中には妖怪のものと思しき宝石を散りばめたような羽が生えていた。

そして、その娘が自分と死闘を繰り広げたフランドールだと知つた時、一誠は訳が分からなかつた。

当然だ、前会つたときは「邪魔だから殺す」と言つていたはずなのに、今では物凄くなつかれている。まるで意味が分からんぞ!!

そして、レミリアから聞いた話だと、一誠は見たこともない龍の鎧を纏つてフランドールと戦い、フランドールを正気に戻すことに成功したとの事だつた。

そして、それはレミリアの予知していた運命とは全然違うものだつたという。

曰く、その鎧にはスペルカードが効かない。

曰く、その鎧には能力が効かない。

曰く、その鎧は赤龍帝の鎧ではない。

曰く、その姿は「霸龍」を制御してるように見えた。

曰く、その姿は戒めより解き放たれ、赫焉となりて全てを滅ぼす龍の様だつた。

——その鎧の名前は「赫龍帝の極霸龍鎧」。

?????????の異変、後に「紅霧異変」と呼ばれる異変は一誠と幻想郷、そして靈夢に多大な変化を及ぼした。

まず、一誠は週一のペースで紅魔館に赴くようになった。永遠亭で発覚したことだが、一誠の血にはあらゆる力を抑え込む特効薬の様な力がある事が発覚した。

つまり、それを定期的に摂取することでフランが狂気に堕ちる事は無くなつた。それと、紅魔館の執事業も兼ねていて。一誠は容姿端麗で家事スキルもエクストラと言つていい。執事にするには確かにもつてこいの人材だ。最も、そこのメイド長の十六夜咲夜が一誠に向ける目はどう考へても異性に向けるそれだつた。

そして、これが最大の変化。

「そんじや行つてくるね、靈夢、母さん」

「行つてらつしやい義兄さん♪」

「どうしてこうなつたの…？」

一誠と靈夢の関係が逆転した。そして、靈夢もまた、一誠を兄として見ていないうだつた。紫は、

「これは、間違ひなく正妻戦争が起くるわね…」

先の事を見越したのか、「一誠の重婚可能婚約届」を密かに作つていたという。

戦闘校舎のトリ・フルードラゴン

第9話 紅の記憶

それはリアス・グレモリーが16になつたの誕生日の日に起こつた。

超絶シスコンの兄の催した誕生パーティーから抜け出し、彷徨いてたところ、誘拐事件に巻き込まれた。

そいつらの顔は分からぬ。ただ聞こえてくるのは、これで依頼達成しただの、たんまり報酬が貰えるだの、低俗な会話。そして、誰かが言つた。

引き渡す前にコイツの身体を楽しもうと…。

この時のリアスは魔法を使えなくなる拘束具を付けられていて抵抗することが出来なかつた。

これは兄の気持ちを無下にした罰なのか？ そうでないにしても、「誰か、助けて…」

♪♪♪♪♪

突然、ハーモニカのメロディがその場に流れた。

「誰だ!?」

誘拐犯の誰かが叫んだ。そして、

「そのお嬢さん、返してもらおう」

『Rebellion Dragon Balance Breaker !!』

リアスの窮地に現れたのは、赤いラインが所々目立つ漆黒の龍の鎧だつた。

「何者!？」

「漆黒の闇より、愚鈍なる力に抗う反逆の牙。『超越の黒龍』ダーク・

リオン…」

リヤアアアアアアアアアアア!!

黒き龍の咆哮がその場に響き渡つた。

「うん…?」

懐かしい夢を見た。初めて一誠にあつた記憶だ。あの後、一誠はその誘拐犯を完膚なきまでに叩きのめし、自分を兄の元に送り届けた（その後兄からの頬ずりがものすごく鬱陶しかつた）。

一誠は（存在を表に知られていない）魔界神・神綺様に招待されて私のパーティいたらしい。私が連れ去られたのを聞いて速攻で会場を飛び出し、私を助けに来たそうだ。どうして場所が分かつたのかは最後まで教えてくれなかつた。

ふと、私の目にある紙が目に止まる。それは卒業後に迫つたライザー・フェニックスとの婚約の概要だつた。

純血の悪魔を残す為とはいえ、私の意見を尊重しないで勝手に話が進むのはどうかと思う。

誰も私を「リアス・グレモリー」としてしか見ようとしない。私は、何時になつたら「ただのリアス」になれるのか？

私は、「ただのリアス」になりたい。人間に純潔を捧げたと言えば、後で老いがれが煩いだろう。ならば、

「私の純潔は、克人に捧げるわ…」

「…………」が、決死の計画も兄の女王によつて水泡に帰すのであつた。

「なるほど、そういう事ね」

「…………」誠は松田からとある相談を受けていた。最初はただの妄想だろうと高を括つて聞いていたが、グレイフィアさんが絡んできてその話が現実味を帯びた。

「それで、今日眷属全員部室に来るようになつたんだけど…」

「十中八九内容が見えてるしな…」

「…悪い、俺今日お前らの所には行けないわ…。ちよつと事情があつてな…」

一誠のセリフは半分嘘だつた。自分の母親に（幻想郷に）呼ばれたのが一つ、もう一つは、カリスマ（笑）の警告だつた。

『あなたはその場に居てはならないわ。何故なら、あなたの存在が世界を揺るがしかねないのだから』

そいつは運命を見ることが出来る。幻想郷からこちら側に戻る時に全て言われた。リアス部長の婚約話、そして、その場に俺が居てはならない事を。

確かに俺はどの勢力にも属していない、所謂ダークホースだ。それが悪魔側に加担してるとバレればグレモリー眷属にどんな影響があるのか分からぬ。俺はその話の概要を後で伝えるように松田と元浜^{ハマ}伝えると帰路についた。

「?????????誠が元の世界に戻る前、幻想郷・紅魔館にて。

「????ミイ？あなた嘘をついたわね？」

「????の通りよパチエ。でも、イッセーは気づいていた様だけど？」

紅魔館の主、レミリア・スカーレットはクスクスと笑っていた。確かに、一誠には嘘をついた。正確には、「(自分達の)ライバルが増えかねないから」だ。レイナーレとかいう烏天狗もどきにとんでもない力を持つたオーフィス、この2人だけでも(幻想郷の女性陣から見たら)脅威なのに、更にライバルが増えるとか御免こうむる。特に、あの姫島朱乃とかいう女は一誠とてつもなく強い絆で結ばれている。今は向こうが心を閉ざしているので力の発現まで至っていないが、あの朴念神が陥落する可能性が万に一つでもあるのだ。その可能性は即刻排除したい。

「でも、こうでもしないとライバルが増える一方よ?咲夜の為を思つたままでよ」

「実際はあなたがイッセーを欲しいだけのくせに:(ボソツ)」「う…!パチエこそ、イッセーの事を見る時目を逸らしてんじゃない!!」

この日も見事なカリスマブレイクが発動し、いつもの言い争いが幕を開けた。

第10話 レーディング・ゲーム準備開始

次の日、一誠は松田と元浜から婚約話の概要を聞かされた。端的に言えば、冥界のチエスを模した伝統？のバトル、「R^{レーディング}・G」で決着をつけることになつたという。そして、眷属がフルにいないグレモリー眷属はハンデとして10日間の猶予、そして、不在の駒として他種族からそれぞれ、僧侶、騎士、戦車、兵士一名を募つても良いと言われたらしい。

「なあ、一誠。協力してくれないか？」

「無論そのつもりだ。お前らと同じ兵士として、な」

「でも、他の駒はどうするよ？」

「当てなら、ないことも無いな。ついでだ、グレモリー眷属の修行も俺の知る場所でやろう」

「俺は紫…お姉ちゃん（本人が嘆願したので呼び方を戻した）から貰…たスペルカードを取り出した。

「ちよつと行つてくる。スペルカード、境絆『幻想への誘い』!!」

そして、戻つてきました幻想郷。先程のスペルカードは俺の能力で紫お姉ちゃんの能力を形にしたもの。これを使うといつでも幻想郷に戻ることが出来る。超便利。ちなみに行先が博麗神社で固定されてる、つまり、

「靈符『夢想封印』!!」

「まあ、こうなるわな。龍鱗『赤龍帝の魔弾』!!」

突然スペカが使われる可能性が否定出来ない。ちなみに、こちらを攻撃した（と言うか不意打ちした）巫女服の少女は自身のスペカを相殺され、更に俺のスペカに被弾した。

「ちよつと！なんで防ぐの!?」

「あんな、あんなの俺が受けられるわけないだろ。靈夢？」

「そうね、私も修行が足りないのかしら？イツセー義兄さん？」

「まあ、こここの所でかい異変なんてそういう無かつたもんな。それはそうと、面白い話があるんだ。一枚噛んで見ない？」

便利符「かくかくしかじか」

「まるまるうまうま…つと。なるほど、それなら私は僧侶で参加しようかしら?」

「騎士は、正直『アイツ』以外の適任者が思いつかんし、戦車は黒歌…と言いたいが、多分リアス部長より実力上だろうし…」

「まあ、義兄さんの力が規格外だから仕方ないわね。義兄さんも全力を出すつもりは無いんでしよう?」

全くもつてその通り。勿論リアス部長には勝つてほしいが、自分より強い兵士がいるとなると何かと文句つけてきそただからな、あの老いぼれども。

「という訳で、ちょっと白玉楼に行つてくる。靈夢は紅魔館に話を付けてきてくれないか?」

「はいはい、分かりましたよ」

靈夢は面倒くさそうに手を振ると、紅魔館の方向に飛んでいった。

「さてと、母さん? 居るんでしょ?」

「流石ね。やっぱりこここの神主となるとこの程度じや誤魔化しは効かないか?」

境内の木々の1本から突然1人の女性が姿を見せる。まだ20代と言つても通用するような美貌、濡鴉のような黒髪、そして、靈夢と似たような巫女服。

「さて、先代博麗の巫女こと『博麗神無』と言うか母さんに質問。俺はリアス部長の元ならどの程度まで力を出してもいい?」

「赤龍帝の籠手は禁手まで出しても大丈夫、霸龍は以ての外。四天の龍の力は司祭の振り子なら使つてもいい。あなたの固有能力は使つたらダメつて所かしら?」

流石は母さんだ。俺の母さんは「力量を測る程度の能力」を持つている。実は母さんは面識がある相手ならその力の波動から現在の実力を読むことが可能。それでも、母さんに匹敵する実力を持つているのは俺と靈夢、紫お姉ちゃん、幽々子さん、聖お姉ちゃん辺りだろうと思うけど。

そう言えば、親父はそれ以上に強かつたらしい。曰く、最強の人里

の守護者と呼ばれていたそなうな。

「所で何時になつたら親父の名前を教えてくれるんだよ？俺が親父を超えたなら教えるつて…」

「そうね、教えてもいいかもね…淨太郎の事を」

「うん？ちょっと待て？」

「まさか、フルネーム『空条承太郎』とかじやないよね？スタンドとか出ないよね？オラオラとか言つてないよね!?過去から蘇つた宿敵とかいないよね!？」

「多分子が違うけど。あなたの父親の名前は兵藤淨太郎、旧姓『空条淨太郎』、最強と言われたら人里の守護者よ。ちなみにオラオラはある人の口癖よ？よくわかつたわね？」

マジ？俺そんな偶然初めて知つたわ。てか、俺のオラオラつて親父の遺伝かよ…。

「そなうそなう言い忘れる所だつたわ。一誠、絶対に本名は名乗つては駄目よ？あなたが本当の名前を名乗ると言つことは…」

「それ相応の者が現れた時、そして、どんなことをしてでも誰かを守る時、だろ？」

そなう、これは俺が母さんと交わした約束。

あの紅い霧の異変で、フランドルを救う為に自分の本名を名乗つたあの日から、決めていた。名前とは、その人の強さそのものを示す。兵藤一誠という名前が偽名という訳では無いが、その名前は力を抑えるための名前にすぎない。

「俺が『一誠』を名乗る時、それは、多分…」

ゲームに負けてリアス部長の逃げ道が無くなつた時に、活路を開く時だろう。最も、そんな時は来ない方がいいのだが…。

「冥界に行つてくる」

「行つてらつしやい、一誠」

俺は幻想郷の冥界、その管理者の住まう場所白玉楼に向かつた。そして、出会い頭に半人前の庭師（本人は否定してるが俺はまだ認めていない）に斬りかかられて、返り討ちにした後そいつを泣かしてしまつたのはまた別の話である。

第11話 グレモリー眷属の修行

「それではグレモリー眷属の皆さん。異世界に行く準備は出来ました？」

「ちよつと待て!!スキマ送りだけは勘弁してく'r…」

「じゃあ遠慮なく」スキマー

「あのな、そんな事言うから紫お姉ちゃんがやらかすんだよ…。勝手に逝ったバカどもを除いたグレモリー眷属一行は畠然とした表情で紫お姉ちゃんを見据えていた。どことなく既視感を感じた。

「あれじやあ、騎士のあなたは白玉楼、戦車のあなたは守矢神社、僧侶のあなたは博麗神社に飛ばすわ。王と女王は一誠について行つてちゅうだい」

白玉楼の元西行妖があつた場所。

「あなたが、グレモリー眷属とやらの騎士さんですね?」

銀髪を短く切つて刀を背負つている少女が祐斗の前に現れた。祐斗は武器を作り出そうとしたが、

「遅いですね」

喉元に抜き身の刀を突きつけられていた。

久し振りだ。自分より速い剣を振るう者は、

「名前を聞いても?」

「白玉楼の庭師、魂魄妖夢。推して参る!!」

「あるほど。グレモリー眷属が騎士、木場祐斗。受けて立つ!!」

の瞬間、剣戟の嵐が白玉楼の庭に巻き起つた。

「白音ー。久し振りニヤー」

「お姉様!どうしてここに?まさか自力で悪魔から逃れて」

「みんな訳無いニヤン(腹パン)」

守矢神社の猫又姉妹の感動の再会は黒歌の腹パンによつて幕を開けた。

「さて、白音?今まで教えるのを済つていただけど、今から仙術の使い方

を教えるニヤ。覚悟は、決めた?」

黒歌から恐ろしい程の妖気が放たれる。

「みんなもの、とつぐに出来ています!」

魔法の森。金髪のシスターが2人の金髪の魔法使いの前に現れた。
1人はいかにも魔女つ子のような衣装で箒を持つており、もう1人は右掌に厚い本を持っていた。

「お前が『聖母の微笑』の使い手だな? 今からお前に魔法の使い方を教える『普通の魔法使い』霧雨魔理沙と」

『七色の魔法使い』アリス・マーガトロイドよ。短い期間かもしけないけどよろしくね
『アーシアの修行、それは自己防衛のための基本的な魔力弾の使い方だ。』

「そして一誠、リアス、朱乃、松田、元浜の5人は紅魔館に赴いた。
〔暁夜〕

「はい一誠様」

銀髪のメイドがどこからともなく現れた。

「それでは、あなた達を特別修行場所に案内します。一誠様、お嬢様と妹様がお待ちです」

ここでグレモリー眷属は屋敷の地下に、一誠は紅魔館の主とその妹に会いに行つた。

そして、

「きげんよう、グレモリー眷属の皆さん。私が『紅魔館の主』レミリア・スカーレット、レミリアと呼んでもらつて構わないわ
「その妹の『フランドール・スカーレット』、フランでいいよ。よろしくね!」

一誠と同じくらいの青髪の少女と金髪の少女が赤い槍と赤い大剣をそれぞれ構えて現れた。

「あなた達の修行内容は至つてシンプル」

「1週間、私達と戦つて生き残れたらクリアだよー」

「という訳で

「簡単に、ギブアップなんて言わないでね？」

グレモリー眷属の、（文字通り）地獄の修行が幕を開けたのだつた。

第12話 グレモリー眷属の最凶布陣

なんやかんやで1週間が経つた。成果を言えば上々だつた。だけど：

「これ、何てチート？」

「あらあら、私達この子達に勝てるのかしら？」

リアスと朱乃の目の前にいたのは、

青と黒の入り混じつた鎧を全身に纏い、白髪の少女と超高速の剣戟を交わす木場。

謎の刻印を右脚に刻まれ、仙術の分身操る小猫。

小さな謎の道具から巨大レーザーを放つアーシア。

更に自分たちもどんでもない事になつていた。

朱乃は、かの死闘（文字通り）の際に墮天使の光の力の一部が覚醒し、雷光を操る様になつた。

リアスは滅びの魔力を圧縮して近接武器に変えることで近距離にも対応できるようになつた。

最も一番伸びしろが凄かつたのは「龍化」の力を得た松田と元浜の2人だつた。

松田は黒い焰を吐き出す悪魔のような黒いドラゴンに、元浜は三つ首の白いドラゴンに変化するようになつた。

だが、結局誰ひとりとして各々の修行相手を倒すことは出来なかつた。

まず、白玉楼の庭師にして「幻想郷最強の剣士」の1人、木場の修行相手にして今回のゲームのもう1人の騎士代理、半人半霊の剣士「魂魄妖夢」

猫又の上位種の猫しようにして小猫の実姉、仙術の達人「黒歌」紅魔館の吸血鬼姉妹（EXVer.）たる紺碧と金色の吸血姫「スカーレット姉妹」

そして、四天の龍を宿し、今代の赤龍帝でもあり、その気になれば世界を滅ぼすことが出来るであろう極龍帝「兵藤一誠」

文字通りの鬼の修行内容だったが、この修行は1週間で幕を閉じ

る。何故なら、

「お兄様——!!」

「久々に楽しめたわね。ありがとう、一誠」

スカーレット姉妹が元に戻るからだ。ちなみに元通りのフランだと大体本気を出したリアス（以前の）程度の実力しかないらしい。「それで一誠、代理のメンバーの紹介をお願いしてもいいかしら？」結果、グレモリー眷属の布陣はこうなつた。

王、女王→リアス・グレモリー（オールラウンダーに転職）、姫島朱乃（雷光操る能力が覚醒）

騎士→木場祐斗（神器の禁手亞種が覚醒）、魂魄妖夢（全力を出してOK）

戦車→塔城小猫（「皇」の力に目覚める）、紅美鈴（全力を出してOK）

僧侶→アーシア・アルジエント（魔力による超攻撃手段を身につける）、博麗靈夢（全力の7割まで）

兵士→松田克人（悪魔龍と流星龍の力に目覚める）、元浜瀬人（精霊龍と蒼龍の力に目覚める）、兵藤一誠（全力の半分も出せない）

解せん、それが一誠の感想である。確かに1週間で王たるリアスの実力は遥かに上がったが、それでも自分の方が次元が違うくらい実力が上だつた。唯一の救いといえば「四天の龍具」の使用の解禁がされたくらいだ。

さて、現状を把握したところで、最後の修行が始まる。

「リアス部長、準備は良いですね？」

「ええ、いつでもいいわ」

ここはゆかりお姉ちゃんに頼んで作つてもらつた亜空間。ここなら俺は全力を出すことが出来る。

『我、霸の理を喰らう龍とならん!!』

霸龍のキーワードを口にした瞬間、途轍もないプレッシャーがリアス部長を襲つた。それでも部長は立つていた。

『ほう? なかなかやるじやないか。ならば…』

『俺の力はどうかな?』

『R a g i n g D r a g o n B a l a n c e B r e a k e r !!』

赫龍帝の極霸龍鎧に重ねがけするようにオツドアイズの力が加わる。そこでリアス部長は倒れ込んでしまった。

「ごめんなさい…」誠。さつきの霸龍？は耐えられたけど、その先の赤い龍は無理よ…」

「それ以前に霸龍に耐えられるだけで凄いですよ」

（言えないわね…正直あの娘たちの全力の方がヤバかつたなんて…）

一誠、ようやく赫龍帝の極霸龍鎧の使用許可が下りる。

「さて、3日後焼き鳥共に目に物見せてやりますか!!」

『『『『俺達の満足はこれからだ!!』』』』

四天の龍が変なことを言つたのは無視することにした…。

第13話 不死鳥は気付かぬうちに霸王の逆鱗に触れる

「さて、皆様準備はよろしいですか？」

「えーと、グレイフィアちよつと待つてくれないかしら？」

ここにいるのはグレモリー眷属十紅美鈴、魂魄妖夢、博麗靈夢と審判役のグレイフィアだ。内心リアスは焦っていた。何故か。それは、「イッセーは、いないの？」

「向こうで異変が起こつてね。義兄さんが当たるようについて」

「あらあら、困りましたね」

「でも、僕達は確実に強くなってる」

「万が一にも、負けません」

「では、ルールを確認します。今回のレーディング・ゲームは正式なものではないので万能の蘇生薬『フェニックスの涙』は使用しません。そして、一誠様の言伝で靈夢様は『夢想天生』を使わない様にとのこと」

「まあ、アレを使うとワンサイドゲームになりかねないわね…。その条件呑むわ。リアスはそれでいいかしら？」

「分かつたわ。転送してちようだい」

「では、転送を開始します」

そして転送されたバトルフィールド。どうやらここは旧校舎、いや

駒王学園を再現しているらしい。ということは、

「ライザーはさしずめ、生徒会室かもな?」

「派手にやつて、ぶちのめす！」

「俺らは最初から、クライマックスだ!! 禁手化!!」

松田と元浜はそれぞれの神器の新たな禁手「魔竜の双銃」と「精靈龍の聖剣」を携えて、新校舎の生徒会室を目指すことにした。

ちなみに途中で敵の騎士、戦車、兵士8人と遭遇するも、

「お嬢さん方、失礼しますね：黒焱双破弾!!」

「あなた方に恨みはありませんが、ここで果ててください！彩華『虹色

太極拳！

「少々眠つてもらう。
靈光破斬！」
スピリット・セイバー

「斬り捨て御免！人符『現世斬』！」

松田、元浜、遅れてやつてきた美齡、妖夢との連携攻撃によりあえな??撃沈した。ちなみに元浜が光の攻撃を行つて頭痛がしないのはその光が己の神器の能力だからだ。

『アザー様の兵士8名、騎士2名、戦車2名、僧侶1名リタイアです』
や木場はと言うと、もう1人の騎士と当たつていた。

「騎士として、全力で倒させてもらう！」

「あん、そんなセリフ吐いてられるのも今のうちだ！」

魔劍創造で一振りの剣を作り出す。そして、

禁手化天地開闢双霸朝

一編二二一

一瞬に二度の斬撃を浴びせてその騎士を倒した。

も

木場は幻想郷の修行で得た力。それは、イツセーが見せた、最強と言うに相応しい戦士の力。その剣は全てを葬り去り、そして世界を切り拓く。その戦士の名は「カオス・ソルジャー」

小猫は黒歌から貰つた不思議なペンダントを握りしめ、仙術を発動させる。

「私に力を貸してください、第29の記憶!!」

小猫はペンドントに宿る「記憶の力」の1つを宿して仙術特化の状態「白音モード」に移行する。この時、右足の上あたりに「29」の数字が浮かび上がる。そして、もう1人の戦車を仙術の分身を駆使した戦いで勝利をもぎ取った。

記憶の力とは、嘗て異世界で戦乱の中心にあつた「ナンバーズ」と呼ばれる力で、小猫が現在使えるのは「N.O. 29 マネキンキヤツト」だけである。何故黒歌が持っていたのかと言うと、幻想郷に来た時にエビみたいな頭をした少年からレプリカだからと言われて預

かつたという。詳しい話はおいおい。

そして、アーシア、朱乃、靈夢は敵の僧侶と女王に接触していた。「アーシア、朱乃。10分でケリをつけるわよ。靈符『夢想封印・乱』！」

「えーっと、魔砲『マスタースパーク』！」

「いい声で啼いて下さい…サンダースピア!!」

乱れ打ちの弾幕と特大レーザー、雷光の槍を浴びせて僧侶と女王を討ち取つた。…かに思えた。

「効かないわね…。消えなさい！」

敵の女王、確かユーベルーナとか言つたか、何故かそいつが生きていた。よく見ると空になつた小瓶を持っているのに靈夢が気がついた。

「アンタ、それはフェニックスの涙よね？確か使わないと約束じやなかつたかしら？」

「あら？誰も使つてはいけないとは言つてないわよ？」

「クソッ…、この屁理屈厚化粧…！」

「命度こそ、木つ端微塵よ!!」

【靈夢、朱乃、アーシアは爆発を避けきれず、

『リ?アス様の僧侶2名、女王1名リタイアです』

「そ?んな!? 朱乃達が敗れるなんて…」
「どうするリアス？このまま眷属を見捨てるか？俺とはい勝負が出来だようだが、もし、このまま続けるつもりなら、お前の眷属が1人ずつ犠牲になるぞ？」

「この、下衆が！」

同時に、リアスはライザーとの一騎討ちをしていた。破滅の魔力を遠近両用で使つて善戦したが、如何せんフェニックスの特性の不死を破れない。そして、この最悪の選択肢。私はどうすれば…、

「部長ーーー!!」

すると、坊主頭の双銃使いで私の兵士の1人、克人が私の元に駆けつけた。そして気がついた。

ライザーが、克人に巨大な火炎をぶつけようとしていることに。

「克人！逃げてええええ！」

時既に遅し。巨大火炎はそのまま克人を焼き尽くした。

「はあ！所詮は転生した下級悪魔…！」

「そうだな…。だが、お前に一泡くらい吹かせてやるさ！」

ギヤアアアアア!!

炎の中から悪魔のような、禍々しい黒い龍が姿を現した。

『ライザー、これが、お前を倒す力だ！黒竜魔炎弾!!』

龍の口から黒い火球が放たれ、ライザーに迫ると思われた。その時

だつた。

『リアス様の兵士1名、騎士2名、戦車2名リタイアです』

(え?)

ドガアアアアアアン!!

当たる直前でそれが爆発した。敵の女王、ユーベルーナの仕業だとリアスはすぐに分かつた。

『ちく…しよう…』

そして、黒い龍だつた克人も変身が解け、そのまま消えていった。

『リアス様、兵士1名リタイアです』

「さあ、どうするリアス？今ここで降参してくれれば、君の眷属は悪いようにはしない。どうだい？」

「…。分かつたわ、降参よ…」

こうして、グレモリー眷属は負けてしまった。しかも、克人は禁手と龍化を行つた反動でしばらく起き上がりくなってしまった。

ところが、これを見ていた三対六枚の翼を広げた女性がいた。

その女性はその勝負の顛末を見届けると、

「さて、この事言つたらあの子がどう言うかしら？」

そして、女性は同時にライザーを哀れみの目で見ていた。

「ライザー、いえ、フェニックス。あなた達は敵に回してはいけない存在を敵に回した。これだけは覚えておきなさい…」
女性はそれだけ言い残すと、どこかへ消え去つた。

?????????????

時は遡ることリアスが降参する5分前の幻想郷。一誠は博麗靈夢の代理として、同時に博麗神社の神主として、後に「邪龍異変」と呼ばれる異変を解決に導いていた。

『まだやるか、異星より来たる侵略者共よ?』

『ぐう…、分かつた私の負けだ。煮るなり焼くなり好きにしろ』

一誠は、赤龍帝の鎧を纏つて八岐大蛇の様な多頭の龍を下していた。そして、

『お前、名前はアナンタか?』

『何故私の名前を!?』

『いや、お前とそつくりどころか多分そのものみみたいな奴がいてな。もしかしたら俺の中で飼えるかなって』

『『『大丈夫だ。爬虫類が増えても問題ない』』』

四天の龍にドライグ、それでこそ俺の相棒だ。

『すまんな。それでは失礼する』

多頭の龍、アナンタは小さな光になると一誠の中に宿つた。そして、鎧をといて背伸びをした。

「ふいー、異変解決。後はリアス先輩達が帰つてくるのを待つて宴会を…」

「一誠ちゃん、そんな暇は無さそうよ?」

「うん? 神綺お姉ちゃん? 幻想郷に来るなんて珍しいね? どうしたの?」

「早くアリスちゃんとくつついて、なんて言いたいところだけど…」

声の主、神綺が暗いトーンでレーディング・ゲームの顛末を話した。

そして、一誠を中心に幻想郷に地響きが鳴り響いた。

「…アナンタ、早速仕事を頼んでいいか? 後、オツドアイ、ドライグ。
霸王烈龍の撃滅鎧オツドアイズ・レイジング・メイルの使用承認を」

『もうやつた。あの焼き鳥にはキツーい処刑が必要なようだ』

『その焼き鳥、ボクより下衆だな。多分、お前の幼馴染の初めて、そいつが穢そうとしてるぜ、主。だから』

「(ああ、焼き鳥を処刑する前に、過去の因縁に決着をつける)」

『(あれ?なんか、俺の中で何か目覚める気がした…。もしかすると

⋮』

その頃、オツドアイズは己の中にある物が生まれようとしているのを感じた。

後にオツドアイズはこの時の感覚をこう言つた。

自分で、荒れ狂う嵐に雷光が迸るビジョンが見えた、と。

第14話 襲来、U.S.C

レーディング・ゲームから2日経つた。リアス・グレモリーとその眷属（松田は除く）はライザーとの結婚式に行く為に魔界行きの列車に乗っていた。

朱乃は、ぼーっと外の景色を眺めている。

このままリアスがライザーの物になれば自分は穢されてしまうだろう。これは、報いなのか？私はあの時、彼を否定した。母とレイナ、そして私を助けてくれた彼を。

『来ないで！この、化け物！』

松田も当面動けないと知り、朱乃は全てを諦めた。朱乃が眠りについた、そんな時だった。

『大丈夫、朱ちゃんもリアスも、俺が助ける』

懐かしい声が聞こえた。ここは、夢の中なのだろうか。声の主は自分がより背の高い、茶髪の少年。私が、十年前に拒絶した：

『もう、いいよ。朱ちゃん、俺はある時を乗り越えた。だから、リアスを助けるために、少しだけ勇気を借りるね』

彼はそう言うと自分に歩み寄ってくる。

そして、次の瞬間

私と彼の唇が重なった。現実時間で10秒ほどだつただろうが、私にはそれが永遠のものに感じた。唇が離れた時、私はもつとそうしていたかった。でも、彼は私の唇に人差し指を当てて、

『続きは、お前の王を助けてからな』

刹那、彼は雷を身に纏う。その雷は私の操る雷光そのものだった。

『借りるな、お前の「力」』

O d d — e y e s V O L T E X B a l a n c e B r e a k e

r !!』

アオオオオオオオン!!

少年は赤い鎧を纏い、更に、雷光を浴びた。二色の眼を持つた翡翠の鎧は、一言だけ告げた。

『朱ちゃん、勝つてくる』

『ええ、お願い。リアスを、助けてあげて』

翡翠の鎧は、私の夢から姿を消した。

「イザー・フェニックス、お前は敵に回す存在を間違えた」

ここまで腹が煮えくり返るのはいつぶりだろうか。ここは、グレー
ト・レッド・ドガ 存在しない次元の狭間。俺は新たな力、
「赤龍帝の雷撃鎧」を纏い、魔界に行く準備をしていた。

『相棒、本当にそんな力で満足か?』

『あの焼き鳥を完膚なきまでに叩き潰す為なら、あれを使つてもいい
んだぜ?』

『俺も、流石にあれは無いと思う』

『女の敵、死すべし。慈悲はありません』

『クリアウイングにここまで言わせてるからね。ボクもドライグに賛
成だよ』

お前ら、いつも増して好戦的だな。まあ、それなら、

「計画変更、焼き鳥をコンティニュー出来なくなるまで叩き潰す!!」

さて、平和ボケしてる現代悪魔に教えてやろう。その昔、世界を滅
ぼした「霸王龍」の力の一端を。そして、

幻想郷を守る「博麗の血族」を敵に回すとどうなるかを…。

ちなみに、遠目から見ていた神綺、紫、神無はこれを見て「フェニッ
クス家のお墓を立てるウラ…」と呟いた。

「ついでに、師匠も誘おう、この結婚式に」

『『『贊成』』』

『イザー・フェニックス、とうとう幻想郷で最も危険な妖怪と名高
い四季のフラワーマスター』風見幽香に目をつけられる。一応、不
死とはいえ、彼は生き残れるのか?

それから数時間後の冥界、元浜は何かヤバい物の気配を感じ取つ
た

「乃先輩、アーシアちゃん、木場、小猫ちゃん、感じたか?今の殺氣」
「ええ」

「私は何も？」

「アーシアちゃんには無理だよ。超濃密度に圧縮して、更に余程の実力者じゃないと感じ取れない殺氣だ。しかも、2つ」

「すみません、気分が悪くなりそうです…」

「とりあえず、あの焼き鳥終わつたな。アイツをマジギレせるなんて相当だわ」

ちなみに、朱乃と木場は辛うじて耐えていたが、小猫が倒れそうになつていた。アーシアは、元浜が神器の力で結界を貼り、守つていた。一方で、とある眷属の王がその場に倒れ伏せた。一応、同じ眷属の兵士に別室まで連れていかれるが、彼女はこんな事を言つていた。

「サジ…、神器を展開しなさい…。他の子にも…、戦闘態勢を取るよう

に、お願ひします」

また一方では、別の眷属の王がこの殺氣の中、それを発している者を待ちわびることにした。

「(ほう。これは、1つは純粹なまでに濃縮された鬪氣のみで、もう1つは同じくらい純粹な魔力のみ。何が飛び出るか、楽しみだな)」

そして、その結婚式の主役たるリアスは、どうにかこの殺気に耐えていた。

「どうしたんだい？愛しのリアス」

「…何でもないわ」

ライザーはこの殺気に気が付かないのだろうか？何が起きてるか分からない、そう思つたその時。

『誰だ貴様ら!?

『人間が、どうやつて冥界に!?』

そして、

『力アアアアアアアアン!!

武場に現れたのは二色の眼の龍の鎧と、傘を銃のように構えた緑髪の女性だった。

数分前、幻想郷の太陽の花畠にて。イッセーは師匠であり、姉のようないい存在でもある風見幽香に事の顛末を伝えた。「絶対に（物理的に

は）死なない奴をぶつ潰しに行く」と言つたら彼女は、「あら、素敵。それで、その結婚式^{殺戮バーティ}はいつかしら？」

「今日だよお姉ちゃん。それと、アレ使うから少し我慢してね？」

「冥界つて悪魔以外の奴が入ると面倒になると神綺が言つてたわね。いいわ、早くなさい」

まあ、イッセーはその気になれば強引に冥界に行くことが可能なのが、神綺のことを思うとこれが最善策に見えた。

「じゃあ失礼して」

——偽装宝具^{リカ・ル・ブレイカ}・破戒すべき全ての符

歪な形の短剣を自分の手に顕現する。そして、それを自分と幽香に突き立てた。パキンと何かが壊れる音を確認すると、すかさず、イッセーは次の行動をとる。

——絆導「姫島朱乃」!!

スペルカードを宣言すると、突然目の前の花畠が歪み、イッセーと幽香は迷いなくそこに飛び込んだ。

飛び込んだ先は、紫色の空の世界で、如何にも金持ちが持つてそうな豪華な屋敷の前。そこに、衛兵と思しき悪魔が詰め寄ってきた。「ここ」で何をしている！ここは、「挨拶しに来た（わ）、お前らの腐れ主人にな！」

『Odd—eyes VOLTEX Balance Breaker!!』

「迅雷のボルテック・テンペスト!!」

「魔砲『マスタースパーク』!!」

イッセーは緑色の鎧を纏い、幽香が傘を構え、それぞれの最高火力（仮）を叩き込む。更に、どうやら屋敷には（無駄に強固な）結界が貼られてるらしいが、

イッセーと幽香は、これみよがしに更なる火力を叩きつけた。

『Odd—eyes Raging Balance Breaker!!』

イッセーが緑色の鎧の上から更に龍を身に纏う。そして、衛兵が応援を呼んだらしいが、時既に遅しであつた。

「憤激のデストラクション・バースト!!」

「魔砲『トリニティ・スパーク』!!」

ドカアアアアアアアアン!!

結界諸共式場に穴を開け、高々と宣言した。

『我的名は「博麗一誠」！幻想郷の守り人、「博麗の一族」にして、この婚儀に異を唱える者なり!!』

「そして、付き人兼その師匠の風見幽香。さて、死なないと噂の不死鳥はどこかしら？」

幻想郷最強の人間と幻想郷最凶の妖怪が、不死鳥に牙を剥く。

第15話 不死鳥 v.s. 最強（凶）コンビ

「『博麗一族』!?なぜ、幻想郷最強の一族が冥界に!?

「グレモリー眷属の中に博麗を名乗る巫女がおつたが、まさか本当にそうだつたとでも言うのか！」

冥界の名家老害共が口々に非難を浴びせようとするが、

「あなた達?これ以上、幻想郷をバカにするなら、強硬手段に訴えるわよ? サーゼクス、ちょっと…」

神綺お姉ちゃんがサーゼクスを呼び止めて、耳打ちをする。ちなみに、その間俺も優香お姉ちゃんも臨戦態勢のまま動かなかつた。

「分かつた。ライザーダン、あなたは我が妹のレー・デイング・ゲームの際に、不正を行つた。だが、私は審判のグレイフィアに言い聞かせてそれをわざと見逃した。なぜか分かるかい?」

「サーゼクス様!? そんなことはある筈が…」

『これに見覚えがないかしら?』

ライザーの言い訳を1人の少女が遮つた。声の方を見ると、脇が見えている赤い巫女服に黒髪を大きな赤いリボンで束ねた少女が封の空いた小さな空き瓶をちらつかせていた。

ところで、あいつの巫女服からかなりドス黒い靈力が漏れてるんだが、鬼巫女か…。宥めるの俺の役目なんだよな…。

「お前、確かレー・デイング・ゲームの時の…」

「ええ、アンタみたいなゲス野郎に覚えてて欲しくなかつたけど、あの時のグレモリー眷属の僧侶代行『博麗靈夢』。またの名を…」

——幻想を守護まもりし最強の巫女。

瞬間、彼女の殺氣が一気に放出された。そこで、悪魔一同（一部を除く）はある事に気がついた。

博麗靈夢は、一体いつからここにいた?

「私ね、今物凄く怒つてるのよ?なぜか分かる?それはね、あの時の戦いで少しも本気を出してなかつたのに、それに気づかないバカ悪魔共がいるからよ! それと、私は最初からここにいたわよ、気配を極限まで抑え込んでね」

多分、紫お姉ちゃんが連れてきたね…。後で○☆H A ☆N A ☆死しないと…。ちなみに、彼女の言う事は事実である。実際、彼女が封じ込めていた殺氣を解放した瞬間、建物が軽く揺れた。なぜ、それほど力が有りながら、ゲームでそれを使わなかつたのか。

彼女は、王の強さを最強としてあの時、戦つていた。だが、訓練の時の彼女は、常にリアスの数段上を行つていた。だから、力を抑えざるを得なかつた。

と、俺が教えたから。だつて、そうでもしないと老害共は黙つてないだろ？ 夢想^{攻撃が効かないチート技}転生^{なんて使つてみ？}なんて使つてみ？ それこそ、文句つけてくるに決まつてる。

「さて、彼女が言うことは一応置いておいて、ライザー・フェニックス。あなたには2つの選択肢をあげましょう」

神綺が提案した選択肢とは、

1. このまま結婚式を継続させる。但し、その場合ここにいる博麗兄妹、風見幽香が（冗談抜きに）冥界を滅亡させる。

2. リアスを懸けてタッグバトル。内容はライザー、ユーベルーナ v s. 博麗一誠、風見幽香。負ければ、婚姻は無効

「い、いいでしようフェニックスの最後の覚悟の炎、冥界の皆さんにお見せしましょう!!」

なんか、死亡フラグっぽいセリフをライザーが吐いている隙に俺は靈夢（鬼巫女）を宥めていた。

「では、決まりね。不死鳥 v s. 幻想郷最強…、面白い余興でしょう、皆さん？」

神綺の一言で老害共が首を縦に振つたのは言うまでもない。

「博麗一誠とか言つたか、小僧？ たかが一人間が上級悪魔に勝てるとも思つてゐるのか？」

「そつちこそ、そのたかが人間に負けるつてこと、忘れんじやねーぞ？」

「博麗一誠と優香お姉ちゃん、ライザーライ^き鳥^鳥シテ、転移した俺と優香お姉ちゃん、ライザーライ^き鳥^鳥ベルーナ。義妹^{おもめ}恋愛^{こい}がつてくれた年増厚化粧^{ねんぞうこうけいじやく}」

「そうか。なら…」

ライザーの全身に爆炎が燃え上がる。そして、ユーベルーナが魔力で出来た玉をこちらに複数浴びせてきた。

「粉々になつて燃え尽きてしまえ!!」

俺と優香お姉ちゃんに超特大の爆発攻撃が炸裂した様に見えた。

「禁忌ノ絆『ファーオアブアカインド・N』！」

俺が4人に分裂し、更に

「「「我、目覚めるは、世界を滅ぼす霸王の欠片の龍なり。それらは四天の龍となりて、今一度霸の理を見出さん!!」」

四天の龍—オツドアイズ、ダーク・リベリオン、クリアウイニング、スター・ヴ・ヴエノムの姿をそれぞれ模した鎧を身に纏い、

「虚無魔砲『ヴォイドスパーク』！」

ユーベルーナの爆発を優香お姉ちゃんが傘の先端から放つた灰色の光線がそれを打ち消してしまっては。

「「「さて、懺悔の用意は出来るか（かしら）！」」

『Odd—eyes Rassing Balance Breaker!!』

『Requiem Dragon Balance Breaker !!』

『Crystal—Wing Dragon Balance Breaker!!』

『Greed—Venom Dragon Balance Breaker!!』

『Aaker!!』

「終末魔砲『ラグナロクバースト』!!」

各々の進化形態に変化して、焼き鳥と年増に赤と紫の光線、黒と白の突撃、そして、優香お姉ちゃん：いや、師匠の最強魔法「ラグナロクバースト」が放たれた。

だが、腐つても不死鳥なのは変わらないらしく（年増はリタイア）焼き鳥はしぶとく生きていた。

「ま、まで…これは、純血悪魔を残すために必要な結婚なんだぞ！」

嘆願する不死鳥。なるほど、確かに筋は通つてゐるな。
だが、無意味だ。

「たつたそれだけのために一人の少女の人生を狂わせてもいい世界なら、俺が、その世界を、『破壊』する!!」

先程のスペルカードで分裂した俺が元の1人の存在に戻る。
龍の鎧をそのまま残して。

嘗て、1つの世界を滅ぼした龍かいた。だが、その龍も元を辿れば願いから生まれたものだった。俺は運命なのかは分からぬが、その龍の力を全て受け継いだ。そして、

俺は幻想郷ですら振るつたことがない力を解き放つた。

『プロモーション・Z—ARC 起動^{アウェイクン}』

その結果、結界が壊れて冥界の1割程が消し飛んだ。師匠は起動前にリタイア宣言して離脱、そして、残された焼き鳥は、

再生しようとはしているが、こちらの攻撃がその速度を上回る。黒に縁のラインが所々入つた、龍を模した鎧の背中から出ている八つの蛇が再生箇所を食い潰し、その度に焼き鳥が怨嗟の声を上げる。

「やめろ…。やめてくれ…。これ以上は、死ぬ…」

「死なねーんじゃないのか？不死鳥だから。さて、今までグレモリー眷属と俺の仲間が受けた痛みの代償、今ここで償つてもらおう。永遠の痛みに悶え苦しみながらな!!」

結界が壊れた箇所から誰かがそれを止めようにも、彼は誰にも止めることが出来なかつた。

1つの世界を滅ぼしたドラゴン、邪龍異変の首謀者の蛇神の力を宿した彼を止められる者など、この場には存在しないのである。

第16話 今代の赤龍帝は女難の相が絶えないそうですよ？

一誠の鎧の背中から出ている八つの頭の蛇がライザーを食い尽くさんとする。だが、食い尽くしても食い尽くしても、その部分は再生する。食われては再生し、また食われては再生する。それは激しい痛みを伴う無間地獄。

ライザーが気を失っているが、それはどこまでも続く。最早、この状況を開けるのは不可能と思った、その時だつた。

「全く、手間のかかる義兄さんね」

「ここまでですよ、イッセー！」

——靈符『夢想封印』

——奇跡『一子相伝の弾幕』

異なる2種類の弾幕が一誠に襲いかかる。一誠は難なくそれを弾き飛ばすと、それが飛んできた方へと見やる。そこに居たのは、靈夢と緑の巫女服の女性、金髪に赤い瞳、宝石を散りばめたような羽をぱたつかせている少女、緑髪に帽子をかぶった少女、黒髪に赤と青の不可思議な羽を生やした槍を持つた少女だつた。

それらを邪魔と判断したのか、五つの蛇の頭がそれらを食いにかかる。だが、

それら全ては、攻撃の対象をすり抜けてしまう。

「無駄よ義兄さん。私の夢想転生とー」

「私の『奇跡を起こす程度の能力』の合わせ技、その名も！」

——奇跡神域『真・夢想転生』

幻想郷の2人の巫女、博麗靈夢の夢想転生と東風谷早苗の奇跡が合わさつて出来た荒業。靈夢と早苗を中心に一定領域にいる存在に夢想転生の効果を付随する能力。だが、一誠は性懲りも無く攻撃を続ける。実は、一誠には彼女達が黒いローブを纏つた5人組に見えるてる。

これは、黒髪の槍を持った少女、封獸ぬえが「正体を判らなくする

程度の能力」を5人に使つてゐるから。

「別に好きでやつてる訳じゃないけど…、お兄ちゃんが暴走してゐるのを見るのは、もう嫌だよ。戻つて来て…」

更に、そもそもどうしてその5人のみを襲うのか。それは、もう1人の緑髪の少女、古明地こいしが2人の巫女の弾幕を弾いた時に、それらが倒すべき相手だと「無意識に」認識させたから。

「帰つてきて、お兄ちゃん！」

そして、十数分くらい経つて、一誠に疲労の色が見え始めた。それを見計らい、靈夢たちはダメ押しを行つた。

「今よフラン！」

「待つててお兄様。今度はフランが助けてあげる…」

最後の金髪の少女、フランの右手に謎の球体が現れる。そして、

「きゅつとして、ドカーン！」

それを粉々に握りつぶした。すると、一誠を纏つていた鎧が突然砕け散り、一誠はその場に倒れ込んだ。

「…………だろう。甘い匂いがする…。誰かが俺に覆いかぶさつてゐるのか？縁の髪から女の子特有の香りがして、その胸のたわわな果実が…つて？？」

「早苗姉？俺に何するつもりだつたの？」

「別にナニも考えてないよー？」

早苗姉が居るということは守矢神社か？でも、そうか、なら良かつ
なんて考へてないよー？」
⋮

「今から既成事実作つてイッセーに守矢神社の神主をやつてもらおう
ワオ、全然良くねーよ。むしろ、もつとヤベーこと考へてたよ。

「お兄様！次は私！」

「私はアンタのこと好きつてわけじやないけど、お礼くらいしなさい
よ？」

「ゴメーン、私もうやつちやつた」

上から順にフラン、ぬえ、こいしの発言だつたが、今なんか聞き捨

てならないワードが出てきた。

「こいし？それは、どういう…」

「えー？お兄ちゃん鈍すぎー。まあ、無意識にやつてしまつたから仕方ないかなー」

ガチヤン

お椀か何かが落ちる音がした。同時にそこを見ると、

ハイライトが仕事をしていない靈夢、引き気味な仕草のレイちゃん、そして、同じくハイライトが仕事をしていない朱ちゃんの姿があつた。更に、目の前には獲物を見つけた眼になつた早苗姉、上目遣い+涙目でこちらを見るフラン、ゴミを見るような目のぬえがいた。神器に話しかけようとしたら、どうやら（霸王の力を解放したせいか??）反応無し。

うなつたら、決めるぜ覚悟（ヤケクソ）！

の日、俺は別の意味で死にかける羽目になつた。

自分が覚めた次の日、朱ちゃんと靈夢からフェニックスの件の顛末を聞いた。ライザーは冥界の病院に入院中で現在、フェニックスの再生スピードを元に戻す治療をしているとのこと。どうやら、アンンタ（Z—ARC発動時に背中についていた蛇）にはフェニックスのみならず、あらゆる回復スピードを遅延させる能力があるらしい。

そして、判明したもうひとつ的事実。これは、オーフィスから聞いた話だが、あれでもZ—ARCの力を1割も解放していないらしい。た話だが、あれでもZ—ARCの力を1割も解放していないらしい。どんだけだよ霸王龍。

その日の夜、博麗神社の境内で大規模な宴会が開かれた。名目は、邪龍異変の解決とリアスの婚約阻止。今度の宴会は幻想郷だけじゃなく一部の悪魔（グレモリー眷属とその関係者）が参加していた。宴会は大いに盛り上がり、ある程度酒が回つたと思ったところで、俺は博麗神社の自分の寝床に戻ることにした。

そして、そこに朱ちゃんとレイちゃんが座つていた。

「2人とも、どうしたの？」

2人とも顔が赤い!?待て、この酒は…鬼殺し!?待てや、誰だこんな

の飲ませたやつ…。心当たりあるな。次会つたら覚悟しとけ。

「イッセー…大好きー…」

詰め寄つてくる2人。正直理性が限界…。

「だから、一緒に寝よ? 今夜は、イッセーの温もりを…頂戴…」
あ、これ理性が完全に崩壊する…。もう無理…。

俺は、この時の記憶がふつつりと消えていた。

そして、目が覚めると…

「…過去最高記録、更新した…」

両脇に朱ちゃんとレイちゃん、俺の体の上にフラン、こいし、ぬえ、
更に、両足に靈夢と早苗姉がしがみついていた。そして、この状況を見
て一言。

「動けない…、誰か助けて…」

その後、様子を見に来た神無に全員を起こしてもらってようやく解
放された。実は起きていたドライグは遠い目でこんなことを思つて
いた。

今代の赤龍帝は女難の相が絶えない、と。

覚醒霸王とエクスカリバー

第17話 白麗の力と「言靈術（げんれいじゆつ）」

『起きてるか？兵藤一誠？』

誰だ？そう思つて目を覚ますと、そこは真っ白な空間。そして、自分と瓜二つの少年が目の前にいた。いや、瓜二つと言つても、特徴が少し違う。自分の方は茶髪であるのに対して、向こうは銀髪。なあ、どう思うよお前ら？

『無駄だ、兵藤一誠。ここは、お前の精神世界の最奥部。霸王龍も天龍も、あの蛇もここには入つてこれない』

お前は何者だ？俺は、白い俺＝仮に白一誠に問いかける。

『俺の名は「白麗一誠」。お前の中の、「白麗の血」の力が具現化したものだ』

ふむなるほど、大体分かつた。博麗がなんで白麗なのかは置いておくとしよう。

『それって裏を返せば、お前、仮に白つて呼ぶけど、白は霸王龍の力を抑え込んでいる力つてことでいいのか？』

『そういうことだ。大体半々の力がお前の中でせめぎ合っていると思つてくれればいい』

なるほど、それなら今まで暴走が起きなかつたのも納得が行く。幻想郷の異変を解決する際、俺は霸王龍の力の片鱗を幾度となく使つている。それにも関わらず、暴走しないのはどういう事なのかと思つてはいた。

『挨拶はこの辺で本題に入る。兵藤一誠、お前は目が覚めると白麗の沢と呼ばれる場所に飛ぶ。その時にコイツが役に立つ筈だ』

白が何かを俺に投げ渡す。それは、青い独特の形を取り、中心に赤い宝石が埋め込まれたような紋章だつた。てかこれは、

「バリアンの紋章？」

『元の世界で「オーバーハンドレッド・ナンバーズ」と呼ばれていた力の結晶だ。お前の記憶を元に作らせてもらつた。カオスにもなれる

から安心しろ』

なんか、ドンサウザンドの呪いとかかかつてそうで怖いんですけど
‥。

『霸王龍を制御してる奴が何を言うか』

「お前が霸王龍制御してるんだろ!?」

『大丈夫、その為に修行するから』

まさか、

「俺は白麗の沢と呼ばれる場所でZ—ARCを制御する修行をすると
?」

『分かるだろ? その修行を何故行うのか。あの時はあの5人が居たらか
ら』

俺は答えることが出来なかつた。確かに、あのままライザーを延々
と攻撃していたらZ—ARCの本能で冥界が滅びてたかもしない。

「で、修行内容は?」

『お前の本来の能力を引き出す修行』

‥。

はい?

「待て、既に俺は2つの能力持ち‥」

『そもそもお前の「絆」の能力は本来の能力のお零れに過ぎない。そし
て、ドラゴンを従える能力もまた然り』

呼ぶ方はドライグが宿つた時点で発動した言わば「体質」だけな
と付け加える白。

なるほど、つまりどういうことだ!?

『いい加減気づけよ、目の前にいるだろ』

『まさか、いや俺の推測が間違つてる可能性も‥』

『ああ、合つてるぜ。お前の本来の能力、それは…』

――言霊を現に変える能力、通称「言霊術」。

??????の日、何かしらの重みを感じて目を覚ますと、

「何????の黒歌、オーフィス」

猫状態の黒歌とオーフィスが俺の上で眠つていた。

「にやー、何だか心地よいオーラがイツセーから感じ取れたからつい
…」

オーフィスも右に同じと言わんばかりに首を振る。

「心地よいオーラ…、白麗の力と関係が？」

『どこでその名前を知ったのかしら？』

ゾクリ：

いつの間にか傍らに紫お姉ちゃんが居た。

「紫お姉ちゃん、もしかして白麗って言葉知ってるの？てか、文字が違うって分かるの？」

「ええ、勿論。でも、予想以上に面倒な事になつたわね…」

「どゆこと？」

「白麗の力…それは博麗一族の力の根源に当たるもの、そして、歴代でその力を振るえたのは」

後の初代博麗の巫女「白麗靈夢」ただ一人よ…。

そして、紫お姉ちゃんが突然消えて、次の瞬間その床が抉り取られる。

「神無、落ち着いて」

「紫？あんた私に嘘を教えたの？」

「嘘を教えるなんてとんでもない。私もさつき実感したのよ？」

俺が母さんを抑えてるうちに紫お姉ちゃんが詳細を教えてくれた。

そもそも幻想郷の守護者たる博麗一族の血筋は今から500年以前に現れた当時最強の人間「白麗靈夢」に連なる血筋。そして、博麗一族の人間の能力は進化する傾向がある。母さんは例外中の例外で能力が進化するよりも体術が進化した。

それが顕著に現れるのが「夢想転生」、博麗一族の奥義にして守護者となりうる者の真の力を解放する。靈夢ならば発動中攻撃が全く当たらなくなり、母さんに至つては体術と組み合わせて接近戦闘最強の奥義「極拳『無想天拳』」を使える。

そして、白麗の力とはそれらを遥かに凌駕した博麗一族の根源の力。妖怪である黒歌が突然心地よいオーラを感じたのはこの所為らしい。ちなみに、黒歌は俺には滅多に近づかない。本人曰く、「何だか

ごつちやになつて近づき難い」。

そして、それを使つていた白麗靈夢の持つていた能力。それこそが、

「言靈を現に変える能力…正確には、自らを媒体にした言葉を現実化する能力」

そして次の瞬間、

ブツリ

「え？」

俺の中で何かが無くなる音がした。てか、

「俺が2人!?」

「ごめんなさいね、イッセー。あなたの存在を2つに分けたわ。赤龍帝と霸王龍を宿す『肉体』、白麗の力を宿す『魂』にね。魂の方に主人格は入つてるはずよ。いいわね？ 魂のイッセー、貴方にはこれから京都に向かつてもらいます」

「1ついいか？ もしかして、肉体に残つてる人格つて…」

「元五重人格が何を言つてるのかしら？」

だろうなど俺は納得した。恐らく、あの肉体には四天の龍の人格が宿つてゐる。絶対に主導権争い起こるなこれ。

「紫、京都に何があるのかしら？」

紫お姉ちゃんが思い口を開いて、爆弾を投下した。

「京都のとある山中の奥地に普通の人間、靈力と神力を宿していないと入れない湖があるわ。その湖の名前こそ…」

白麗の沢。私が靈夢を弔つた場所にして、博麗一族の聖地。そして、あなたが修行を終わらせた暁には、兵藤一誠、あなたが本当の意味で幻想郷最強の存在になるわ。それこそ私や優香、幽々子といった幻想郷の古参勢ですら勝てない存在にね。

紫お姉ちゃんがそこまで言つたのに疑問を覚えた。幻想郷最強の存在になつてどうなるのだと。

「いづれ分かる時が来るわ…」

訳も分からぬまま、俺（魂サイド）は京都にスキマ送りにされた。